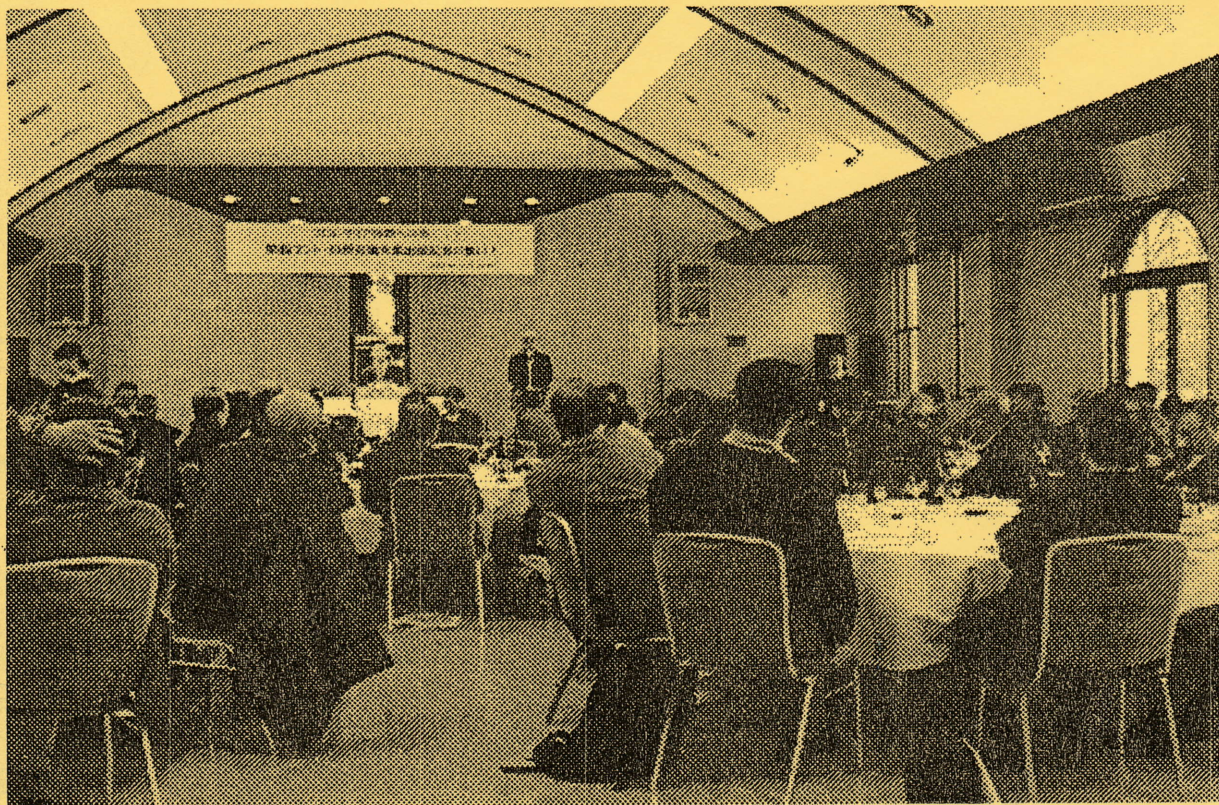


★21世紀—新たな共産主義運動の 論争の開始を！

2006年

1・29「関西フロント・田原芳論文集」出版記念の集い～報告集～



<呼びかけ人> 前田裕悟 土方克彦 松岡利康 岩田吾郎

巻頭言

「一つの妖怪が（・・京都）にあらわれている、共産主義の妖怪が。」とスラヴォイ・ジジェク流に表現しても良いだろう。「古文書」の復刻刊行であった、『関西ブント・田原芳論文集 プロレタリア独裁への道<I>』の出版記念の集いを京都で開催した。

「再建ブント第6回大会以来の幅広い結集となった1. 29『全国集会』?でした・・」又「これが革命派の再編うんぬんと関係があるかは判りませんが、忘れ去られた田原さんの理論、そして田原さんが作り上げた関西ブントや同大学生運動に光を当てたことは確かだと思います」との感想も寄せられた。昨今の60年代「回顧」談義と違って、スピーチの方々がまじめに、生き生きと当時の状況、教訓、総括そして展望を提起された。

関西ブントを「原点」として、30数年を経たの多様な感想、意見を、この「報告集」を一読されれば理解されると思う。この「幅」は強いて言えば関西ブント創設からあって、その強みでもあった。さらには、古典的な「党派」を超える広がりや影響力を持っていた。このことは、現代の活動家の参加も含めて、多様な系譜の参加者にも現れていました。今後、参加者の中から、多様な新たな共産主義運動の

論争と取り組みが開始されようともしていません。21世紀の「共産主義者同盟」については、旧来の「大ブント構想」云々とはまったく違う新たな可能性もあると思われる。

その一環としてこの「報告集」の刊行もあります。

スピーチの方々、参加者の皆さんには多忙の中、原稿執筆、加筆、修正等をしていただき、ありがとうございました。

最後に、70年代以降の世代である、「同志社大学学友会」資料編纂委員会・M君、人民新聞社・I君の協力で、報告集を刊行できたことを、申し添えます。

岩田 吾郎（「共産主義運動年誌」会員）



目次

○司会あいさつ～土方克彦	3
○開会のあいさつ～前田裕晤	3
○故田原芳夫人のあいさつ～中島洋子	4
○反弹圧アピール～松岡利康	5
○献杯・乾杯の音頭	6
★スピーチ「関西ブントと田原芳氏の思い出」	
○佐藤浩一	7
○田中正治	9
○新開純也	15
○塩見孝也	17
○高橋道郎	23
○佐藤秋雄	25
○三上 治	27
○蒲池裕治	32
★会場スピーチ・文書	
○天野 博	34
○蔵田計成	35
○小林一夫	40
○前田良典	41
○畑中文治	47
○高橋道郎	48
★同志社大学学友会資料編集委員会のアピール～水野裕之	49
★閉会のあいさつ～岩田吾郎	50
★【復刻】若きプロレタリア戦士・同志望月上史を悼む	51

司会あいさつ

土方克彦（64年同志社大学入学）

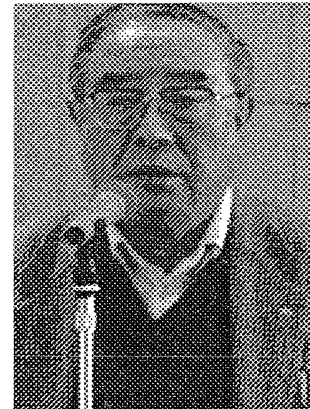
中島鎮夫さんの、「田原芳論文集」の出版を記念して、出版記念の集いを開催します。

今日は、同志社大学、関西ブントの方々に留まらず、中島鎮夫さんにゆかりがある方々が全国から参加されています。又、70年代以降、様々な活動をして来られている方々も参加され

ています。さらには、ブント系ではありませんが、立命館大全共闘の流れの方々も参加して頂いています。・・・今日は、中島鎮夫さんを焦点として、さらには、60年代の闘いを振り返りたいと思います。

開会のあいさつ

◎前田 裕晤 ～(大崎 悟)



- 50年大阪中央電報局(中電)就職
- 53年同志社入学
- 61年中電日本共産党細胞解散。中電労研(労働運動研究会)結成。機関誌『電通労研』
- 67年関西地区反戦連絡会議結成・議長
- 89年電通合同労組全国協議会・議長
- 89年大阪全労協結成・議長
- 04年全労協・副議長
- 「労働運動における新左翼活動家の任務」(『共産主義』15号・63年)他
- ◎現在「協同センター・労働情報」共同代表

前田裕晤です。今日は、中島君の論文集が出来上がり、この様な集まりになりました。まるで、おばけと亡霊が集まっていると言う人もい

るかも知れません。当時の関西ブントの動きなり全国のブントの動向については、蔵田計成さんも来てるし、本名よりもペンネームのほうが通用する人達から、いろいろと語られると思いますので、個人的な中島君との関係も含めて述べることにします。

中島君は同志社にはいったのは59年でした。私はその時、同志社の大学院から立命の大学院・日本史に変わったときに、新聞学の後輩の高野澄、学友会の委員長をやっていましたが、下総町の同じ下宿にきた中島鎮夫君をつれてきました。大学院は立命でしたが、私は殆ど社会学科の住谷申一教授の研究室に入り浸って、住谷研究室に出入りする後輩との関係はそこで出来たのです。中島君は、同じ社会学科でも社会学の専攻でしたが、何時の間にか活動家は住谷研究室に学部を超えても集まるよ

うになっていて、その中の一人でした。私は、戦後最後の旧制中学入学生で、戦争の影響もあり、父親がいない、生活は自分で働き、学費も稼がなければならない世代で、昼間は大学で、夜は労働の生活でしたが、就職難の時代ではまだ恵まれていると判断されたのか、大学院に残れと言われた経緯があります。夜は大阪に戻らねば成らないのですが、遅くなると良く下総町の高野・中島の下宿に泊まりにいますから、今日は中島君の奥さんもきてますが、奥さんも知らないような彼の恋愛問題や、様々な問題も熟知しています。

中島君の性格には、彼の両親の存在があると思います。お父さんは、私と同じ通信講習所の出身で、内地ではなく、国策会社の満電・満州電電ですが、そこに勤めていて、選抜されて当時、上海に出来た「日本精神風土研究所」に研究員として派遣されたのです。そこには内地では許されない左翼思想の持ち主達が集まっています。後の共産党の風早八十二らもいて、戦中で

したが上海では比較的思想の自由の幅があったようです。

お母さんは上海の東亜同文書院(日中の学生を集めた異色の大学)出身の才媛ですから、ご両親はかなりモダンな性格を持っておられたと思います。このお二人とは、私どもが子育て共同住宅を作ったとき、一緒に住んでおられて、親しくさせて貰いましたが、年を取っても非常にロマンチックで夢見るような性格が、中島君の性格形成に大きなウエイトを占めたと思います。

ブントの出発についてですが、京都の学生運動の中から共産党と決別して生まれるのですが、私は大阪中電で活動していきまして、60年安保闘争で1・16羽田闘争に青年行動隊の派遣団が全学連と一緒に闘うのですが、大阪に戻ると共産党の査問を受け、後に自殺する事件が起きました。私が引率した責任もあり、大学院修士課程を修了と同時に、労働運動に専心する道歩んだのですが、ブントの中には、共産党の内部闘争を経て合流し、新たな前衛党を目指した部分であり、日共の歴史からみても、そう簡単なものではないと認識した部分と、前衛党建設は、いかに課題を實力闘争で戦い抜く中から作られるという認識、これは闘いが失敗した場合は、非常にもろい性格を持っている。この前衛党観の違いがあったのではないかと、今から思うとあったとおもいます。そうでなければ、あれだけ全国で高揚し、結集した活動家が、なんで雲散霧消したり、分派闘争に明け暮れるかの説明がつかない。今になってこの言い方は、なぜあの時と思うと、申し訳ないといえませぬ。

当時の我々の発想の根底には、「味方でなけ

れば敵だ」があったのではないかと、むしろ逆に、「敵でなければ味方だ」として、但し、味方の度合いは1から10位のランク付けがあったとしても、その事を認識してやれるほどの主体性を持つての運動を成し遂げられなかった。だからこそ、問題提起集団としての役割は果たすことは出来た。60年安保では、共産党の「神格化された前衛党観」を打破する事は出来た。70年の時には、社会の擬制の権威は崩す事はできたが、それに対置する社会観を大衆の前に提示出来なかった。

今回、田原論文全体は、そこまでの具体的提示迄には至っていないにしろ、彼なりに全体的な理論展開を成し得ているのは、時代の要請と同時に30代の彼がそれに答える能力があったからだと思います。

もう一つ、関西の立場でいうと、市大のグループからの発言もあるかと思いますが、やり残した事がある。今の立場と違ったとしても「よど号」事件の後始末は、関西の我々にとっては避けて通れない問題だし、運動をかって共にした経緯からすれば、あとの面倒は見なければならぬと思います。

今日、この復刻本を、私自身も面識のなかった岩田君が完成された事に、本当に感謝しています。田原論文の整理と出版の動きは、坂井君(故人)が持っていった経緯もあるのですが、今回、初めて実現しました。

私自身も72歳となり、自身の整理も必要な年代になりましたが、せめて60年、70年代に共に歩んできた事を、後悔のない想いで、以後の生涯もお互いに生き続けたという確認を持たせたいと思います。

故田原芳夫人のあいさつ

中島洋子

中島洋子です。遅れてしまっていて申し訳ありません。どうもすみませんでした。こういう席で、どういう挨拶をしたらよいか分かりません。今年で中島が亡くなって18年になります。我が家からも、中島の痕跡が少しづつ無くなって

きているというのもおかしいのですが、ダンボールがいくつもあるようになってしまいました。そんな時に、岩田さんから、田原芳論文集を出したいと言われ、私はどう言う事かなと思っ、本を出すという話は何回かあったん

で、又かな、何で今頃?と最初は信じられませんでした。でもその後、熱心に準備されて驚きました。そして本当に出版され、今日こんな席で挨拶するように言われ、どんな風にしたらいいか、一人では行きにくく、娘に頼んで一緒に来てもらいました。中島が、亡くなる前はいろいろあって、私は運動については、あまりよく分からないのですが、後半は、心身ともに病んでいました。亡くなった時は、悩みや、苦しみから解放され、安らかになりました。

最近はこの時代を見て、あの当時うちの家にいろんな方がこられ、理想を語り、議論をしている様子を見て、なんであんなに一生懸命なんやろうと思いつつも、一途に一生懸命の姿は、私の人生の中で、一番感動的な事でした。そして今回そんな当時、中島が一生懸命に書いていたものが、こういう風な形で復刻されて、うれしく思います。子供からは時々、晩年は中島も病んでいましたので、あんまり良いと父親ではなかったの、「何であんなお父さんと結婚したの?」といわれて、「昔は良かったのよ」と言っていたのですが、こういう風に本を出していただいて、私の言い訳じゃないけれど、私の

人生を少しでも分かってもらえるかなと思っています。

本当に何を言っているのか良くわかりませんが、今日は、私の面識に無い方々も来て頂いているもたいで、中島が生前ずっと色々お世話になったんだと思います。ありがとうございました。今日は本当に皆さんたくさん又遠くから来ていただきありがとうございます。岩田さん、土方さん、松岡さん、お世話になりました。私事ですが、中島が亡くなったからずっと我が家を支えて頂いていた前田さんには色々お世話になっています。今日は40年ぶりとかの懐かしい方々にお会いできてうれしく思います。何か取り留めの無い挨拶でどうもすみませんでした。今後ともよろしく願います。今日はありがとうございました。



反彈圧アピール

◎松岡利康

70年同志社大入学

70年同大「文学部共闘会議(L共闘)」「全学闘」加入。

72年同大文学部自治会・委員長

78年『季節』創刊(〜88年12号)

◎現在「鹿嶋社」社長



松岡です。今、土方さんの方からご紹介がありましたように、昨年7月12日に突然に、神戸地検特別刑事部に刑法の名譽毀損罪の容疑で逮捕されました。で、一週間前の1月20日によく保釈になりまして、皆さん方の前に姿を現し、ご挨拶させて頂くことができました。不埒にも、獄中メッセージの方が気合が入っていいんじゃないかという人もおりましたけれども、なんとか192日の拘留で出れました。ここにいらっしゃる方々の中には5年、10年と拘留された方もおられますので、まだひよこ

ですけれども何とか出てきて、これから裁判闘争をやっていくことになりました。

事件の内容につきましては、お配りしている裁判ニュースとか、そういうものをご覧になって頂きたいんですが、岩田さんが田原さんの論文集を作りたいんだと突然に連絡してこられまして、既に、印刷所にも前金を払っておるんだということで、それに感動して私も微力ながら協力しようと思いました。校正の最中であと10ページ位残すところで、突然に家宅捜索・逮捕ということになって、出るのかなというふう

に心配していました。そしたら、また突然に岩田さんが、拘留されていたのは、「神戸拘置所」なんです、神戸拘置所に面会に現れて本を差し入れて頂いて、で、あとがきの方にも私の事件のことをですね、書いて頂きました。私は別に望んだわけではないんですが、今日の集会の呼びかけ人にも名を連ねて頂いて、本当に嬉しく思っております。

私は、土方さんが紹介されましたように、1970年に同志社大学に入学しまして、ちょっと遅れてきた世代なんです、田原さんという方は私にとっては非常に伝説の方でした。で、ずっと学友会活動をやり、ヘルメットがここにあります、全学闘の運動をずっとやってきて学費値上げ阻止闘争で既に一回逮捕され、前科一犯となっております。今回の裁判闘争は、何とか憲法判断までもっていったらいいなと思っております。弁護団も10人という弁護団で、中には早稲田の全共闘の議長をやっておられた、大口昭彦さんも弁護団に加わっておられて、強力

な弁護団です。ほとんどが、いわゆる新左翼系の弁護士が支えてくれるんですが、そのように、弁護団も強力な弁護団で戦っております。何とかですね、私もいつまでも若い若いと思っておりますが、50代半ばになってきましたので、人生最後の大事な仕事だと思って頑張りたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

みなさんの中にも、私がやっているこの雑誌(『紙の爆弾』)つぶしの思惑も一つあったんじゃないかという方もおられますが、丁度雑誌も創刊したところで、私も逮捕、長期拘留ということになって、会社もほとんど壊滅状態みたいなことになっております。幸い若い社員なんかが引き継いで何とか雑誌も継続発行して、これから会社の再建もしていこうということですので、是非とも今後書店で購入して頂くなり、あるいは定期購読して頂くなりして支えて頂きたいなというふうに思います。ま、簡単ではありませんが、私の挨拶にかえさせて頂きたいと思っております。

献杯・乾杯の音頭

仲尾 宏 (56年同志社大学入学)

56年同志社大学入学の仲尾です。この前、確か1990年に「夢は世界を翔けめぐる」という中島君の追悼の会があった事を、思い出しました。

それから15年になる、もっと前を言うと同じ私学会館であったと思うけれども、中島鎮夫君と洋子さんの結婚式があった。……。えー、今、中島君の新しい本が出版されたこと、色々松岡さんを始めご苦労があったと思っております。それから、この間にですね、数えてみれば島成郎、唐牛健太郎、…。同志社だけで言っ

ても田所伴樹、藤本敏夫、二人の望月、たくさんの方が幽明鏡を異にされています。……。中島鎮夫君含め、献杯とそれから新しい本の出版を記念した併せた乾杯プラス献杯をしたいと思っております。

どうぞ、ご起立お願いいたします。それでは、幽明鏡を異にされた中島君始めその他の方々の冥福を改めてお祈りするとともに、場所は違っても志をもって今も生き抜いておられるみなさん方の健勝を祈念して、献杯兼乾杯をしましょう。「献杯・乾杯！」

スピーチ「関西フントと田原芳氏の思い出」

(敬称略)



◎佐藤 浩一 ~ (飛鳥浩次郎・花井 正)

55年同志社大学入学

59年共産同同志社細胞結成。機関紙「小さな旗上げ」。

62年関西共産主義者同盟結成・議長

66年共産同第6回大会・副議長(議長、松本礼二)

68年共産同第7回大会～

68年共産同労働者革命派結成準備会・機関紙「労働者革命」

○「反帝社会主義の現代的課題」(『共産主義』復刻準備号・65年)他多数。

◎現在「著述業」

「関西フント・田原芳論文集 プロレタリア独裁への道<I>」に目を通しながら、中島鎮夫の懐かしい息づかいを感じました。人なつこさと生真面目さと…。もう亡くなって15年余にもなるのかとの思いをあらためて強くなりました。

中島との付き合いは、彼の同志社入学年の1959年からで、とくに同志社フント結成以来濃密なものとなりました。彼の下宿が下総町(烏丸鞍馬口)、私の下宿が相国寺北門前町、大学への路の中間にあり、おまけに酒屋の2階とあって、機会があれば出入りし、議論をし、ガリ版を切っていたのを思い出します。学年は1回生と5回生でしたが、歳は二つ半しか違わず遠慮のない間でした。出町界隈の飲み屋で一緒に飲み、議論したことも数えきれず、密度の濃い付き合いでした。彼は大学に入る前は、年譜によると浪人となっておりますが、大変遊んだようで、ダンスはうまいし、自称、非常にもてる青年だったようですね。そして付き合いはフントでもずっとつづいたわけです。

ところで、フント結成からその解体への歴史は、京都の地から見るとひととき短いものでした。1958年12月の結成。59年6月の唐牛全学連の誕生、11・27安保反対デモ国会突入闘争、60年1月の羽田空港突入闘争、4・26国会闘争、6・4国労政治スト、6・15国会前闘争、6・18行動の不発と翌日の新安保条約の自然成立、そして安保闘争の総括とフントの分裂……。関西のフントグループ

は、こうした中で、いわばフント残党ともいべき存在でした。

ここで、フントへの移行時における共産党内でのわれわれの位置を確認しておく、各大学の学生細胞は、各地区委員会に所属する一方、京都府委員会もとの学生委員会に代表者が参加、学生運動の方針を討議し決定しました。当時のメンバーは、委員長が西京司、全学連指導部として星宮昭生、そして京大、同志社、それに立命、京都府立医大、学芸大からのなどの細胞代表で、フント結成まえの6・1中央批判などをめぐってさまざまに対立がありました。そのなかから結局、同志社細胞(佐藤、仲尾宏、高野澄、浅川清など)、京大細胞とつづいてフントに移行しましたが、魅力的なオルガナイザーとして京都にやって来た、生田浩二、唐牛健太郎の人柄に共感してフント入りした同志社などは、トロツキーに関する知識もなく、自前で情勢を分析し方針をたて、運動を組織していました。

東京で行われていたフントの総括論争にも積極的に参加できず、やむを得ずマルクス、レーニンの政治理論に依拠しながら独自に安保闘争の総括を試み、運動を持続した。これに同様の状態におかれた京大の若手グループ、浦野正彦、清田祐一郎(永井武夫)、渥美文夫(佐々木和雄)、新開純也(八木沢二郎)などが合流しました。同人誌的な機関誌の発行を始め、やがて組織的なものにして、指導機関の形成へと進み、やがて関西フントとして形をととのえて

いきました。学生運動とは別に、独自に組織を形成し、プントの労働戦線の中核を担っていた大阪中電（前田）、そして大阪の学生組織（市大など）も合流しました。こうした関西プントにおける運動と組織活動は、やがて東京から、あるいは九州から、四国から多くのグループ、個人が交流を求めてやってきました。関西としての問題意識は、プントの再建へ、とくに安保闘争の総括の中で分散し分解してしまった安保闘争時の指導部に復帰を求める事に向かいました。で、当時そういう形での可能性はどうだったかという、例えば第一次プントの島成郎書記長も、何度か京都にきてですね、わが汚い下宿にも訪れ、話し合った。彼は、早々と政治活動から撤退したように言われていますけれど、なかなかそうではなくて、なにも分からないんで何でもいから資料をくれという葉書が来たり、あるいは懐かしの「つるや連合」の時、山の上ホテルに島さんが陣取って、中村光男さん経由で私を呼び出し、「どうなっているんだ」と指示をだすなど、結構やる気があったのではないかなどの記憶があります。そんなこともあって、清田や中島などつぎつぎに東京へ出てその可能性を探りましたが、なかなかうまくいかない。結局自分たちで取り組む必要が確認されました。

一方、旧日共港地区委員会の高橋良彦（松本礼二）らのプント再建への協働へのさそいがあり、やがて組織をあげてプント再建への取り組みを開始しました。時々東京へメンバーを派遣するのではちがらんから、それを確実に保証するものとして佐藤が東京に職をえてまず移転、中島、浦野、渥美、塩見孝也（一向健）がつづきました。再建の方法は、その対象となる組織との討議、共通点の確認、相互信頼、そして共同行動にもとづく組織統合であり、その交渉の役割は主として佐藤、塩見が担い、高橋、黒岩卓夫君などのグループ、広松渉さんや古賀暹君などの独立社学同のグループとの協議のなかから65年統一委員会の結成に至りました。広松さんとは、それこそ毎週のように会合を重ねましたが、それをドイツ語でメモしているのには驚きました。そうした活動の延長上に66年9月の第二次プント再建を実現しましたが、

マルクス主義戦線派グループとの交渉の時に、岩田弘さんとの協議は主に佐藤が担当していたと思います。

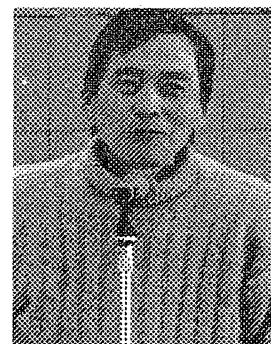
第二次プントはご存知のように、明大闘争の評価や政治闘争の位置づけをめぐる論争、対立のなかで、やがて組織的対立—分裂という経過をたどりますが、この時の私のスタンスは、一致点を見出し統一することの難しさ、分裂の容易さを主張し、分裂回避に力を尽くすことでした。苦勞してせつかく一致点を見いだして第二次プント結成に至った訳ですね。これを壊すのは簡単だから、そういうことはなしにしようということで、最終的には中島君の家で会議を招集してもらい、そこでいったんは分裂を回避しようという合意をとって、東京へ帰ったら、中島から事情が変わった、合意はキャンセルするという連絡がありまして、それをもって第二次プントは分裂のコースを辿るという経過が思い出されます。まあやはり一致点をつくるというのは大変だけれども、相違点をつくる、見出すのはそう大変じゃない。これは勢いがあります。なかなか止められるものではない、という苦い経験があります。

そのあと私の関西プントは終わったわけですけど、その後70年に中島が上京した折に、関西にもどるような強い働きかけがありました。その時は、そう簡単にはいかないといまいに終わりましたが、さらに81年に、私が京都市内の短大の非常勤講師の仕事で京都にほぼ一年通った時に、中島とは何度か旧交を温める機会がありました。体の調子が良くなさそうでしたが、何を書いているのか、どんな計画があるのかなどお互いに熱心に話し合った記憶があります。

いま彼がいれば、ここにみんなが集まったように、その後の世代とわれわれ第一次の世代とを結び付ける、その両方をよく知っている存在として、本当に居たらなと繰り返し思うわけですけれど、非常に懐かしい存在ですね。

中島との話で、プントはどんな意味があったかは当然話題になりましたが、私の立場は「民主主義の徹底化—その延長上にある直接民主制の実現」を理念とした大衆運動でした。新開君には、それが佐藤さんの限界だと言われました

が、この考えは今も変わらず、ローザ・ルクセンブルク、ハンナ・アーレントの諸著作を読み返し、スーザン・ジョージの「オルタ・グローバルイゼーション宣言」に共鳴し、地域での住民運動への参加に際しても、「公共的空間」形成の拠り所としています。あの学生運動の時代、まさにちょっと声をかければすぐに集まって討論をして、行動を決定しデモに繰り出すようなことを日常的にやっていたという、そういうコミュニケーション的な結合こそ、われわれの故郷だったと思うわけです。こう思い返すだけで心が震える思いです。



◎田中 正治～(竹野 巖)

60年同志社大学入学

61年学友会・書記長

62年京都府学連・書記長

64年全国自治会代表者会議・実行委員長

69年共産同第9回大会・中央委員、

71年共産同(RG)結成

◎『第三の転換点』と我々の課題』(『戦士』5号・64年)他

◎現在「新庄水田トラスト」世話人。他。

田中正治です。僕は、1960年、同志社大学入学です。思い出しますと、4月に初めて同志社の校門をくぐったときに、ずーと100人位が両方に並んでいるんですね。そこを一人ひとりはいってそこでピラを一人一人渡されて、おそらくもったピラが100枚から200枚くらいだったと思います。さすがに大学というのはこういう所かと、すごく納得したんですが、その時実は安保闘争の高揚期だったんですね。これが大学だ、というイメージでしたから、あつという間に学生運動をやりまして、5月くらいに確か、プントに入っちゃったんじゃないかと思っております。ここにおられる佐野君なんか僕より早くプント入っていて、1年生が10人位入っていましたね。本当に、分かってんのかどうかわかりませんが、プントの勢いとかっこよさに、さっと入るといふ何というかフィーリング、ノリでした。で、中島さんはその中では、おっさんみたいな感じだったんです。僕は10代のペーペーなんですけれども、中島さんは、2浪か3浪してましておやじという感じですね、すごい落ち着いてて、このなんともい

今回発刊された「論文集」には、根気よく、誠実に取り組んだ様子が読み取れますが、なるほどということも、ちょっと待てということもありますし、まだ全部読めていません。ただもう一緒に議論できないことが残念でなりません。私とは一回りと年が違う世代の間にあった中島がいたら、このような集まりもずいぶん違ったものになったと思われまふ。以上で簡単なメッセージとさせていただきます。ありがとうございました。

えない笑いですね、それでにこっとされると、ころっといくというような非常にいい男だったです。

とにかく、彼は政治過程論、プントが崩壊した時、同志社の山本さんが草案されたと思うのですが、政治過程論は、安保闘争、60年安保のダイナミズムを戦術的に理論づけるみたいな感じで、僕はすっかりしてたんですけど、中島さんは、これあかね、という感じの発言をしてたんです。すごい違和感があるという発言をしていましたのが、僕には印象的でした。彼は、大学の校庭にいきますとね、レーニン全集を2冊くらい小脇に抱えて下駄を履いて闊歩するというばんからな感じでね、とにかくレーニンをいたく尊敬しているという感じの人でした。だから、僕らがトロツキーとかローザ読むと「そんなん読むな、軟弱じゃないか」というような発言をされまして、この人は絶対レーニン主義者だという感じで、非常に骨太でしたね。言う事やることがばんからだったし、度胸もあつたし、なんていうんですかね、ズバッと剃刀で切るというよりは、ナタでたたいてぶつ

たざる、そういう印象でした。理論もそうですし、行動もそうでした。で、なんであの人が政治過程論に対して違和感をもったのかなと、今度のこの集まりの前1週間ほど考えたのですが。

あの、酒を飲みますとね、彼はやたらと戦争の話をしてたんです。と、言いますのは、彼は満州引き上げですね。満州にいた頃、戦争で日本が負けた時、7歳だったと思います。7歳というのは物心ついてたし、大体見てるわけですね、おとなの動きも。酒を飲むと、そのときの逸話をいっぱい話すんですよ。それに軍歌がめっちゃめっちゃ好きでした。“ここは、お国を何百里、離れて遠き満州の、赤き夕日に照らされて・・・”というあの軍歌。酒を飲みながら片っ端から軍歌を朝まで歌うということを僕は繰り返してました。時々、マルクス、レーニンを話題にする。どこでどうなってんのかわかりませんが、ただ、僕は今思いますと、戦争における日本の敗戦ですね、その原体験というのは、彼には決定的だったかなと思います。ちょっと今思い出しますとね、彼の戦争中の記憶ですけれども、八路軍、中国共産党紅軍ですね、その兵士が屋根の上にはぼんと座っていて、銃を持ちながらタバコをぶかーとふかしながら一時間に一発くらいパーンと打つんですって。あの戦争だから我々、日本軍だったら、突撃って感じでワーてやるでしょ。そういうイメージはない。つまり大陸的なんですよ。全然、波動が違う。波長が違うといえますか、悠々とした銃撃戦をやっている。それが遊撃戦だと何回も僕に言いましたね。僕だけでないですよ。飲んでたやつに。それからあと、今思い出しますのは、戦争に負けた日、中国共産党、紅軍の人が来ましてね、普通やったら敗戦の人に対してちょっとえらそうにするじゃないですか。おまえらめっちゃくちゃやがって、みたいな、そういう事は全くなかった、非常に礼儀正しく礼節であったと、何回も言いました。それから、おじさんっていったかな、近所のおじさんが敗戦の日に『私は共産党の秘密党员でした』というご挨拶をして、ちゃんと部落人たちに、日本はこうだったよという話をされたそうです。彼は7歳だったので内容はどこまで分

かったかわかりませんが、そういう印象をもったとのことでした。

それから、ソ連軍が入ってきたときの印象も言ってましたね。「ダバイ、ダバイ」ロシア語で女、女という意味らしいですね。ダバイ、ダバイといってソ連軍が片っ端から略奪していく、女性に対して暴行強姦するという事を片っ端からやったという事です。その事の印象をよく彼は語ってました。そういう事からいいますと、中国共産党八路軍の礼儀正しさ、規律、それからちゃんとした地下組織を作ってますね、革命を準備していた事、あんまりあわてずにですね、悠々として戦争をやっていた事、そういうことが彼の記憶の中にずいぶんあったように思います。

で、そういう事を思うと、どう見たって政治過程論、つまり戦術で事態を乗り切っていくような革命の考え方に対して違和感を持った、持たざるを得なかった、だから、彼は組織ということをしごく強調したようにおもわれます。彼は組織と規律の人だったと。僕らが運動という言葉を使ったらしごく怒られました。運動じゃない、活動だと。つまり、活動というのは意識的な行動ですよ。運動というのは、ころころと自然発生しているという、そういう事をいうと、だめだよ、活動なんだよ、意識的な活動をせよ、とよくいわれまして、僕は、なかなかそうはできませんでしたがけれども。

69年にいきなり飛びますけれども、政治過程論で僕なんかも育ちまして、マルクスとかレーニンとか高校時代から、一応なんか読んでたんですね。不思議と。読んでたんですけど。一番好きだったのは、ダイナミズムでした。だから、関西ブントって僕大好きだったですよ。何故好きだったかという、色んなやつが全然違うことを平気で言うわけ。これ、よかったですね。あの中核派っていうのは、マイクロフォンでしょ。指導部が言うこと同じこと言う。お前らいいかげんにせえ、馬鹿やろうという感じですね。お前人間かという感じがあったんですけども、関西ブントはね、みんな違うことをいう。最大公約数あったんでしょうけど、自分で自分の判断で行動する、自分の判断で組織する。今の社会でいえば、ネットワークですよ

ね。今の社会やったら関西ブント抜群、そういう感じを僕はずっともってますね。ネットワーク社会を先取りしてたんじゃないかと。多様性を認めてたというよりも、平気でやる、誰もそれに対して文句をいわない、

まあ印象的なことでいうとあの時、機関誌なんでしたっけ、戦旗ですよ、戦旗を便所紙として使っていた奴がいる。そのぐらいの感じだったんです。戦旗がその辺に落ちていても踏みつけていく、中核派やったら、殺されたんじゃないかて感じですけど、関西ブントはその辺のところは、指導部に対して権威っていうか全然なかったし、すいません(笑)。何かいろいろやりましたが、僕は同志社で中島さんの子分という感じで、中島さんは親分て感じでした。あの、気風のいい、いい親分だった、面倒見もよかったですしね。なんか時々、空論的な事もおっしゃったですけども、それはまたロマンティックでいいじゃないですか(笑)。

69年にまたかえりますけど、僕ら、やっぱりつけがまわったと感じました。69年、あの武装闘争に入っていく時、戦術主義で楽しくやっていたから、そのつけがどーんときたというのが実感でした。つまり武装闘争というのは重いですよ。大衆運動のようにいきませんか、監獄にいくか死ぬかというのが現実に訪れますから、そうすつと、これ生半可じゃねえ、ということになり、慌てて党とは、軍とはてことになりまして、軍を組織する政治質とは何かとか、マルクスは何て言ってたとか、レーニンが何て言ってたとか、いや、毛沢東はこうだったんじゃないかとか、いわば、うわーとにわか勉強していきながら、自転車操業してるみたいな感じはありました。まあ、そういう流れで、僕も軍事委員なんていうのになりまして、ここに軍事委員長というのもおられますけれども、やっぱり厳しかったですよ。

塩見さんもここにおられますが、赤軍派がああいう風になっていくっていうのは、手に取るように分かるっていったら怒られますけど、本当に気持ちはしごく分かりましたね。手に取るようにわかった。塩見さん達がやっておられることを僕ら横目に見ながら、ここはまずいん

じゃないかと参考にさせて頂いて、自分達の戦略、戦術を練っていたというところが本当はありましたよ。塩見さんたちはああいうふうに行馬でやっておられなかったら、僕らはひょっとしたら、また全然違う運命を辿っていたかもしれないでしょうね。きつとね。そういう意味では歴史的には、我々は赤軍派に感謝するところもあっていいんじゃないかと思っております。

いずれにせよ、我々は政治的には敗北したと思います。それは事実。でも今思いますと、60年代の敗北、左翼を中心とした爆発的な闘争というのは宇宙史でいえばピックアップではなかったと。このピックアップがあつてこそ70年80年90年のいろんな形での社会運動というのが起こっていったんじゃないかというふうに思っております。フェミニズムにしてもね。カウンターカルチャーにしても、協同組合の新しいいろんな動きにしても。いきなりとびますけど、団塊の世代のジュニア、30歳くらいの人達を中心に今つきあってるんですけどもね、すごい良い感性でやってますよね。僕らみたいに古びた博物館行きの感性じゃなくて、ピカピカ。大体50代前半とか40代の人って、団塊の「偉大な世代」に対するコンプレックスとか憎しみをもってるでしょ。こんな奴がいろいろ悪いことをしやがってという。今の30代くらいの人達は全然関係ないですからね。団塊ジュニアにとって、全共闘の闘いは、いわば明治維新のお話のようなものでしょうから、全く違う感性で非常に伸びやかに戦争の問題に対しても、パワーと運動をやりますし、いろんなオルタナティブな課題に対しても非常に独創的な運動をやっています。つき合わせてもらって非常に楽しい感じです。

2000年になってすごく希望を感じているんですよ。9.11テロがありましたでしょ。そのテロの後、2001年に世界社会フォーラムというのができまして、5万人から10万人くらいブラジルとかインドに集まって、イベントをやってますよね。巨大な社会運動で、背景には多分1億人位の人がいるとおもいます。あんなの雑多じゃねえかっていう風に酷視する人もい

く可能性がある。昔の僕らのような政治主義で、むちゃくちゃ党派主義で、殺しあうとかそういう事は絶対しないだろうと思います。彼らの感性は信用していい。僕らの感性は摩滅しちゃっていて、ちょっと二線三線引いたほうがいいと思う。僕らが一線にたったら、ろくな事がない。いざとなったら悪い癖が出ますからね。平和なときはいいんですよ。平和な時は、いいおじさん、いざとなったら悪い癖が絶対出る(笑い)。だから二線三線引いて、受け皿を作って30代のジュニアたちにのびのびやって

もらう。あんなやつら金がない、アイデアとセンスはあるんだけど、金がない。金は、皆さん会社勤めの方は、いっぱいもっていることでしょうから、もっと投資して若者達に事業をやらせてやって下さい。そうすれば、我々の第二の人生も楽しくなるんじゃないかな、というふうに思います。中島さんが、世界革命とか世界プロレタリア独裁とかおっしゃっていた事は、全く内容は違うけれども、今ですね、本当に、世の中で進んでいると思います。というように、ご無礼いたしました。

★田原 芳氏の追憶

2006・1・29 田中正治

田原 芳「プロレタリア独裁への道」は、1960年代、関西BUND系活動家の思考と行動を左右した「政治過程論」の欠陥を、早くから気がついていた田原氏の理論的集大成であったことがわかる。60年安保闘争高揚期に入学し、闘争に参加した世代の僕にとっても、戦術の視点から全政治状況のダイナミズムを解剖する「政治過程論」は、ほぼ違和感なく受け入れられる論理であった。だから、1962年ごろだったか「ジャコバンとイタリア」(「戦士」二、三合併号)という小論で、グラムシの陣地戦に対抗したボルディガの機動戦—ある種の永続革命思想を積極的に肯定したと記憶する。

しかし田原氏は、僕の記憶では、「政治過程論」に対して違和感を表明していた。59年入学の彼は同志社大学での共産党解散—ブント結成に参加していたと思われ、だからか党的発想をいつも漂わせていた。彼はレーニンをこよなく尊敬していたように思われた。60年安保闘争の総括や敗北後のブント分派闘争の総括を、彼は、いわばレーニンのフィルターを通して思考していたように思われる。トロツキーの永続革命論に対しても批判的だった。革マル派的意味ではないのだが、組織的思考を離れた戦術主義的発想にたいしては、小ブル急進主義として批判的だった。これは単なる推測だが、彼の幼い頃の旧満州での記憶に原点があると思う。八路军(中国共産党指導の紅軍)の悠々とした大陸

的な銃撃戦の風景、厳格な規律と敗北した日本人に対する礼節ある態度、日本敗北の日、近所の親しかったおじさんが共産党の秘密黨員だったことを知った時の驚き……他方、ソ連軍による略奪や婦女暴行の生々しい記憶。組織、規律というものの決定的大きさ、重要さを原体験として持っていたのではないだろうか。だが彼は、冷徹な組織亡者ではなかった。人間的に魅力ある、時に豪快な吾らが”親分”であった。

1960年代の激動期に執筆した「プロレタリア独裁」の中で展開している「前衛派」と「赤軍派」に対する批判でも、彼は党の自然発生性に対する意識性の優位性、重要性を、従って、正規の包囲軍としての党と軍及び全人民の武装の重要性を強く訴えている。レーニン主義の原則に戻れ、長期のスパーンで考えよと。しかし、現実には、政治過程論的志向の極限で突入する赤軍派の前段階蜂起、国際根拠地、臨時革命政府樹立という急進主義的な動きに対して、彼は「レーニン主義の原則であるところの武装蜂起は、人民の武装蜂起の機関と不可分一体のものである事を忘れ、全人民の武装の獲得のための困難な任務から償還しているのは何故か」と自らを問い、そのような視点から世界プロレタリアートの独裁、世界党、世界赤軍、資本主義批判、共産主義運動について、党綱領委員長の立場から論陣を張っていたように思われる。赤軍派の内部ではどのように受け止められたかは

わからないが、いわゆる12・18ブントに結実する運動の内部では、理論的・実践的成長への大きなきっかけになった。だが、重い大きな武装闘争の予感の前に、組織が戦闘団的性格を避けがたく持っていったとき、思想的指導チームとしての綱領委員会を党建設の中に位置づけることはなかった。連合赤軍の敗北の後に、我々は彼が提起した課題に対しても、包括的な理論形成を本格化させることになる。

田原氏が全精力を傾倒したと思われる「プロレタリア独裁への道」が、復刻されるのも9・11同時多発テロ以降のドラマティックな状況の中で、人々の何かへの予感がそうさせているのだろう。私としては、1970年の歴史的文書としてだけではなく、「世界社会フォーラム」に象徴される第二期革命運動・アソシエーションムーブメントが直面する実践的な理論問題へのヒントを探るものとして読みたい。

@@@@@@@@@@@@@@@@

★対抗的革命運動

(1) 2001年9・11同時多発テロ(ブッシュ政権による陰謀説が台頭している)以降、アメリカ帝国の多国籍世界企業・軍事力・キリスト教原理主義vsイスラム世界・イスラム原理主義の二項対立・永続戦争の時代に突入したかに見える。ここからの脱出口はないのか。第三の道はないのだろうか。

私は、1999年シアトルでの「反乱」が引き金になって、2001年以降開催されている世界社会フォーラム(WSF)に脱出口、第三の道を見出す。2001年から2005年までブラジルのポルト・アレグレとインドのムンバイに5-10万人の社会運動活動家などが集まって「もう一つの世界は可能だ」を合言葉に、現代世界の革命の重要な諸問題についての論争がなされている。金融、教育、医療、食糧、労働、知的所有権、先住民、暴力、差別、国際権力、連帯経済、価値、フォーラムは広場か運動体か……。資本主義の災禍に対抗する闘争と資本主義に対抗する価値とシステム創造についての論議と交流の場なのである。これらの社会運動家達の背景には数千万—1億人くらいの運動があるのだろうか。「世界社会フォーラムは、新自由主義、

資本主義やあらゆる形態の帝国主義に反対し、人類の間の、並びに人間と地球の間を豊かに結びつけるグローバル社会を建設するために行動する市民社会のグループや運動体による思慮深い考察、思想の民主的な討論、様々な提案の作成、経験の自由な交換、並びに効果的な活動を行うためにつながりあうための、開かれた集いの場である。」(世界社会フォーラム原則憲章より)

(2) 1848年革命以降の革命の特徴は永続革命であった。ロシア革命にしろ、また中国革命にしろ、プロレタリアートは、ブルジョア革命をブルジョア的内容にとどめることなく、ブルジョア階級の収奪、社会主義革命にまで連続的に転化させた。この場合、政治権力の奪取が社会革命の前提条件であった。従って、政治権力の奪取をリードする革命党による一元的支配をもたらす社会的根拠を持っていた。一方、現在、資本主義経済の高度な発展とグローバル化は、新しい社会運動を世界的規模で生成・発展させてきていて、この運動は意識しているか否かは別にして、直接、社会革命の要求を掲げて登場している。例えば、ラテンアメリカでの「連帯経済」、西欧での「社会的経済」、「協同組合地域社会」など。だが、政治権力奪取の後に始めて、社会革命を目指す旧来型の革命運動は、登場している新しい社会運動に対応できないでいる。なぜなら民主主義的要求を戦う人々や組織を、政治権力との闘争のパワーとしてのみ活用しようとするからである。登場している新しい社会運動は社会革命の要求を掲げるが、政治権力の奪取を目指さない点で、対抗運動あるいは、対抗的革命運動と呼ばれる。

(3) この対抗的革命運動の起源はどこにあるのだろうか。1968年に象徴される反乱に求められよう。日本でも1960年代は、急速な社会的再編の時期だった。「農村共同体」が分解・空洞化し、人々は都市と工場に吸収され、資本の下(「企業共同体」)に国家主導で再編されていく過程であり、同時にまた、価値観が資本主義的工業的に急速に再編される過程でもあった。社会は軋み、対立が激化した。ベトナムの戦場

は反乱の溶鉱炉であった。社会は武力対立に発展した。資本・国家・古い共同体総体を攻撃することによって、その編成過程を分解させ一気に権力の壁を突破しようとしたのである。この闘いは永続革命の最後のチャンスだったかもしれない。旧来の”大衆運動の指導部としての党”は一気に再編を迫られた。人々は政治的民主主義の要求を超え、社会細部のみならず総体の内実の変革を熱望していた。従って社会総体を変革する目標・共産主義社会とは、プロレタリア階級独裁とは、共産主義運動を指導する革命党とは、革命軍とは、人民の武装とは・・といった問いが焦眉の課題として運動内部から発せられるのは必然だった。だが実際には、そうした根本的問いへの回答が不燃焼なまま、状況は戦士達を戦場に投げ込んだのである。連合赤軍の闘争、HJ、アラブ赤軍の闘争に代表される70年代前半のゲリラ戦が様々な形態で展開され、浅間山荘で一つの時代を区切ることになった。戦術主義的な発想の永続革命の思想は、手痛い代償を得て敗北した。(我々は、このとき革命運動における「倫理」に直面したが、それはまた別の物語である)

私が所属した共産主義者同盟(赤報派)は、70年闘争が直面した課題—共産主義運動の原則、資本主義批判、共産主義社会、プロレタリア階級独裁、共産主義運動を指導する革命党、革命軍、社会の種課題の運動に対する態度を、あらゆる事態に対応できる革命党建設作業の中で説明・宣伝しながら後退戦を闘った。

1970—80年代も続く資本主義の高度成長は、資本、国家、共同体の再編と結合を完成させると同時に、人々の生活と社会の物資的基盤を驚くほど“豊か”にし、知的・教育水準を高め、階級を成熟させ、その結果、武力革命の条件を衰退させていった。

(4) 1960年代の革命運動は、敗北した。しかしだが、それは1970年以降の新しい社会運動へのビッグバンとなった。武力革命を衰退させた同じ条件である資本、国家、共同体の再編・完成、豊かな社会、階級の成熟そのものが、同時に新しい社会運動の土壌になっていたのである。1970年—80年代に、市民運動・NGO、消

費者協同組合運動、フェミニズム、カウンターカルチャー運動、有機農業運動、マイノリティーの運動、環境・エコロジー運動、障害者運動・・・資本に対抗的なオルタナティブな運動が、左翼の政治運動とは別に、社会革命の要求を掲げて登場してきたのである。

世界的に見ても事態は共通している。例えば、カソリックの神父・レイドローによる「西暦2000年の協同組合」(1980年)は従来の協同組合運動に革命をもたらした。生産—消費にわたる世界の食糧問題の解決、生産協同組合による第二次産業革命、異種間協同組合の集合体による協同組合地域社会の建設など。資本制とは逆に、協同組合は労働による資本の支配形態でもある。剰余価値実現を生命とする資本制経済に対抗しつつ、非資本制的Associationを発展させ、資本主義を侵食しながら、力を削ぎ、最終的に死滅させる運動の一形態でもある。

また、カウンター・カルチャームーブメントの流れは、ユニークな創造的運動で注目される。巨大コンピューターに対抗するIT革命を準備したパソコンの開発、工業化農業に対抗して、一般市場とは別に生産—流通の独自システムを持つ有機農業やパーマカルチャームーブメント、グリーンピースに代表される環境破壊に対抗する運動、国家貨幣に対抗する地域通貨・LETS・・・これらは世界大の運動として浮上している。

これらの運動の特徴は、改良でなく、無意識であるが、社会革命を要求し実行している点にある。例えば、知的所有権で完全武装したマイクロソフト帝国をゆるがしているOS・LINUXフリーソフトは、21世紀情報資本主義の根幹になる知的所有権(特許権)そのものを、全面否定したオープンソース・ムーブメントであり、未来を先取りしている。

(5) 1990—1991年、東欧、ソ連の崩壊、東西冷戦構造の崩壊は、唯一の超大国となったアメリカ系多国籍国際資本主導のグローバル化を加速させた。国民国家の上に立つWTOを利用して国際資本は、剰余価値実現のために、国民経済、地域経済、資本と労働、資本と自然の内部に直接的影響を行使し、社会の再編を促進して

いる。それと同時に市場原理至上主義の価値観で、人々をマインドコントロールしようとしているのである。

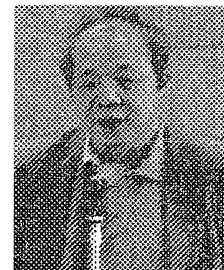
(6) 1999年いわゆるシアトルの反乱は、北側国家と多国籍巨大資本による世界規模での市場原理至上主義的社会の再編と価値観に対抗する民衆の反乱であった。従来、協力関係になかった労働運動と環境運動、農民運動、消費者運動、先住民運動、市民運動が、資本の権力によるこの社会の再編成によって共通の利害を持つにいたった。

グローバル資本の「世界経済フォーラム」に対抗する「世界社会フォーラム」(2001年創設)には、従って、シアトル、ジェノバをはじめ波状的に闘われている世界権力に対する街頭闘争に登場するNGO、労働運動、消費者運動、協同組合運動、フェミニスト、環境運動、先住民運動、農民運動、アナーキスト・・・などが登場する。

「世界社会フォーラムは、参加団体や運動の行動が、自らの行動をローカルなレベルからナショナルのレベルに定め、地球市民権の問題として国際的文脈への積極的な参加に勤めることを、また、彼らが連帯に基づく新しい社会の建設において経験している変革を導く諸実践を、グローバルな課題にしていることを促進するプ

ロセスである。」(世界社会フォーラム原則憲章)

(7) 世界社会フォーラムは、資本主義の災禍に対抗する闘争と資本主義に対抗する価値とシステム創造についての論議と交流の場なのである。実際、資本主義の災禍に対抗する闘争は、帝国と巨大資本が仕掛ける戦争に対抗する世界大の行動やカジノ型金融システムに対抗する行動、また商品ボイコットの行動を含み、他方、資本主義に対抗する価値とシステム創造には、決定や管理よりも対話と協働に基づいて組織される「連帯経済」、「社会経済」、「協同組合地域社会」などの「アソシエーション型ネットワークを、国際レベルと同様にローカルレベルやリージョナルレベル、ナショナルレベルに建設する」行動を含んでいて、それは社会革命を内包している。



◎新開 純也～(八木沢二郎)

59年京大入学

62年同学会・委員長

71年共産同(全国委員会)結成

○「ドイツ革命とローザ」(『戦士』4号・64年)他。

◎現在「NPOアクセス」理事長

新開でございます。まずはこういう場を作って頂きました岩田さん、それから松岡さん、それから土方君に感謝したいと思います。中島君のこういう本を出して頂き、又、旧交を温められるこういう場を設定して頂きまして、本当にありがとうございました。中島君はですね、年はちょっと上なんですけれども、同じ59年、昭和34年に安保闘争のさなかというか直前というかそこに入学しましたんで、同期でありまし

た。で、従っているんなその後の活動の交友みたいな事もあって、いい思い出があるわけです。例えばこれは奥さんとか娘さんを前においてなんなんですけれども、ケネディの暗殺の時にですね、中島に会った時にですね「おい新開、ホテルから出てきたら、ケネディが殺されて号外が出たんや」言うて、破天荒な、みなさんがおっしゃるようにカッコいい青年でありました。

また、あの奥さんの実家であるのでよく当時の関西ブンドの指導部会というのがありまして、そこでなんか色々ありまして非常に覚えているわけで。田中正治君も言いましたけれども、関西ブンドができて、私の師匠というのは佐藤さん、飛鳥浩次郎さんが今でも私の師匠だと思ってるんですけど、で、政治過程論ができていんな大衆運動やって、その後いわゆる第三期論というのができてですね、当時は私が京大、正治くんが同志社、市大が藤本昌昭(旭凡太郎)君が、当時の関西ブントの学対を形成していて、そのちょっと下に後の赤軍派世代、京大で塩見君とか高原君とかがいて、同志社には蒲池君とか藤本君とかがいて、市大は田宮君、戸梶君とかがいて、錚々たるメンバーがいて概ね赤軍派に流れたというのが代々の流れ。で、そういう事で、当時、第三期論から、それからいろんなベトナム反戦等々ということで、70年闘争になだれ込んで行く。

で、せっかく今度中島君の本を送って頂いて、最近私も会社の整理もつきまして暇なものですから、一通りまじめに読みまして、半分懐かしいなという思いと、それと当時も思っていましたけれども、若干のやっぱり田原理論ということに関して、別に異論があるのではないのですが、どっかに書いてあります永続革命から世界同時革命、世界プロ独という流れでいわゆるブントの綱領問題成立というような事になっているわけですが、当時も若干の違和感を感じていましたが、改めて読ましてもらってやはりある違和感を半分は持っているわけでありまして、で、時間もありませんので、簡単に独断に結論だけ申しますと、やはり永続革命から世界同時革命の流れは、これは一つの流れとは思いますが、永続革命の克服の仕方というのは、やはりもう1つあるんじゃないかと僕はずーと思って、それは当時おまえグラムシ左派だとか言われていたんですけども、今でもそういうふうに思っております。

というのは、こうご存知の通り、永続革命というのはマルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」から出て、初期マルクスというのは、マルクスがマルクスになる為の過程としては了解できるわけですが、これも今日も来ておられま

す榎原均君なんか論じておられますけれども、ま結局のところ後期マルクス派は、私が読んだ限りでは、広松渉とかアルチュセールだとかの立場ですが、やはり流れとしては正解でないかと、要するに後期マルクスの立場に立たなければならぬと思っております。「ヘーゲル法哲学批判序説」の永続革命論は、後期の「資本論」によって世界同時革命論によって止揚された。で、その次はレーニンとトロツキーの永続革命ということでありまして、トロツキーの複合的發展ということに基づく、そういう永続革命論ということも、これも克服しなければならないという風に思っています。やはりレーニンの「ロシアにおける資本主義の発展」から「帝国主義論」あるいは「二つの戦術」から「四月テーゼ」そういうレーニンのながれというのは、やはり正解だという風に思っているわけなんです。

で、ただ現実におきた革命、ロシア革命、あるいは中国革命、あるいはキューバ革命、すべて成功した革命というのは、永続革命型というのか、まあ、比喩的に全て民主主義革命であった。つまり、これは共産党が主導したとしても、全て民主革命であって成功した革命はすべてそうであったというところに非常に問題があって、最終的にいわゆる先進資本主義国における革命の成就というのは結局これまですべて流産しているというところに、深刻な問題があるというふうに今でも思っているわけなんです。第三期論というのは確かに私とか正治君が政治過程論の後で、出したわけではありますけれども、その裏側には当時のプロフィールにも書いてありますように、ローザ・ルクセンブルクについて(「ドイツ革命の敗北とローザ」八木沢二郎・『戦士』4号・64年)書いた背景というのは成就した革命というのは結局、永続革命型なのに対して、それが先進資本主義国における革命というのは一体どういうものだろうかということを当時からずっと、ま、ある意味では今でも考えているわけですが、その事が依然として我々にとっての大きな課題ではないかという風に思っております。

そういう意味で中島君が言っているようにですね、まずはレーニンに帰り、そして、その後の

中では僕は依然として相対的に一番ましな問題提起するのは先進国革命論としては、グラムシが一番いいだろうと風に思っております。グラムシは最近ある種の流行でありまして、パレスチナのサイドだとかあれも非常にグラムシを持ち上げているわけでありまして、概ね大体非常に文化主義的に。最近はまだマルクス・レーニン主義は流行りませんからそういう流れに全部なっておりますけれども、やはり我々も原点に帰ってレーニンそしてある範囲でグラムシの先進国革命論という事をちゃんと研

究していくという事が必要でないかとまじめに考えておりますので、今日、田原理論というのを改めて読ませて頂きましたうえで、私どもも前田さん程でないけれども年でありまして、何らかの形でそういう事をまとめられたらいいなという風に思っているこの頃でございます。いずれにしましても、こういう集会を主催者が作って頂いて感謝致しまして私の感想としたいと思っております。どうも、ありがとうございました。



◎塩見 孝也～(一向 健)

62年京大入学

63年京都府学連・書記長。

65年社学同・書記長。

66年共産同第6回大会・政治局員・学対部長

68年共産同第7回大会・政治局員

69年共産同赤軍派結成・議長

○「我々の緊急の任務＝世界党建設に向けて」(『烽火』7号・68年)他。

◎現在「自主日本の会(ばとり)」代表

皆さん、塩見です。何か指導して来たという言葉が出ましたけれども、僕は指導して来たというポジション、そういう自覚は、当時なかったし、基本的には関西ブンドの、飛鳥さんを始めとする先輩筋のいろんな路線を忠実にやって来たというのが正直な実感です。ま、僕は旧関西ブントの、全くの弟子を自認しておりますから、そういう謙虚な気持ちでいつでもいるという事をご承知願います。

えーと、中島さんについてはたくさん思い出があるわけですが、僕は1962年に大管法闘争をやって、大管法闘争が勝利したんですけども、その後、京大につくよりは、学対の命令で同志社の蒲池裕治君とか藤本敏夫さんとか前田良典君とか堂山道生君とか、同志社支部と一緒にやってくれと言われてまして、で、同志社についたんですね。で、当然にも中島さんがいらっやっやっ、そこ中でどっちかっていうと同志社ブントというのかな、そういう中で63年はやって来たんです。だから、そこで中島さんの薫陶を受けたというかまあそういう事なんです。で、中島さんについてみますと、

俺について彼の方がオッサンなんだけれども、「塩見のオッサン、オッサン」言うて、そういう言い方で、非常に親しみをこめてね、付き合ってくださいなんです。それから、中島さんて、今日、田中正治さんが言われてはっきりわかったんですけども、やっぱり中島さんはトロツキー主義者だとか政治過程論主義者よりは、はっきり言って、飛びっきりの、レーニン主義者だったと、思うんですね。確かに戦術もたくさん関西ブンド流に持って展開されておりましたけど、言われてることは一番、原則論からね、常に問題を出して行く方で、僕の強い印象の中では、「政治過程論で次は日韓だ、次は何々だ」という形で考えてくのに対してね、いつだったか「やっぱり社会主義を言わなきゃあかんと、世界革命を言わなきゃあかんと、それからプロレタリア独裁は言わなきゃあかんと、暴力革命も言わなきゃあかん」とね、こういう事をいきなり言い出されてね、へーと思ったんだけど、別に理屈として反論できないしね、これはこれでいいじゃないかとね、そんな感じなんですよ。

どっちかっていうと僕らは、新開さん、もちろんレーニン主義であったわけですが、でも、トロツキー的というのかな、政治過程論のいろんな伝統の中で育ちましたから、ま、いわば大衆運動大好き人間という、そういうのに対して、中島さんは一風変わった、いわば最大限綱領的な原則論を出される方というか、しかもそれが、僕の感じでは関西ブンドでは珍しい、サムライ的にね、豪快な形でがっと思われてね、「俺はこう思うんだ」という形でね、言うんですよね。で、その辺のところは、何か意見交換しながらこうなっていると、説明付けて行くやり方よりも、自分が考えた結論をぼんと出してね、おっしゃるわけです。そういうのがね、俺はなんかね、「すごい、こういう問題の立て方をしているんだ」と、そんな感じを、ずっと感じてました。

で、その辺は、結局それが「世界同時革命」論を、ドイツイデオロギーから引用したという形でもって、70年安保闘争が前哨戦を展開する頃から、ずばり出されて、政治過程論、第三期論、そして、それに継ぐところの世界同時革命という形でだされてね、それで一本、関西ブントに、筋が通ったのではないかと、思います。で、僕なんかは彼の世界同時革命論というのを背景にしながらね、過渡期世界論なんかも着想して行ったふうに、思ってるんですよね。

もう1つ、10・8羽田闘争のときに、東京の中島さんらと一緒に僕も送りだす側だったんだけど、帰ってきたら中島さんのチラシが出て「学生諸君よくやった」とね。これがね、まかり通ってね、「へー」やっば指導者だったらこういうかたちで、どんと構えてね、言うのが指導者の一つの作風なのかと思いました。で、この辺は今、田中正治さんがおっしゃたように生い立ちというのかな、中国共産党なんかのいろんな作風なんかも学んだ事なんかもね、中島さんのありようではないかと、こういう風に思っております。

で、まあそういう事をふまえてね、政治、世界同時革命という問題は理論上死に絶えてないし、今後も必ずよみがえってくると思うんですけれども、で、その事をね、今の現状に照らして考えてみますと、いわば、あの当時はね、中

島さんにもあったんですけれども、レーニンを引用したり、あるいはマルクスを引用したりすると、これは当時の коммуニストの作風だったと思うんですけれども、それが前提に立って、それで共同主観が成り立つような時代だったと思うんですけれども、今はソ連が崩壊し、そして、中国が路線転換し、当時の民族解放闘争なんかが一応実現されたと、こういう状況でグローバルニズムの時代になった時に、いわば僕らが運動する世界的な背景というか、後ろ盾みたいなものは、ほとんど無い。この中で資本主義の矛盾はあると、いう中でね、その中で自分が信念をもって戦うところの、人間らしさというか、拠り所は何か、人間的ありようが何か、そして、社会をどうよくするのかというのを誰にも頼ることなくね、いわば、戦っていかなくやならない。

言うならば、自主独立、自力更生で、己の信念、想像力に立脚し、自分の頭で考え自分の言葉で語り、進んでゆく中でこそ、その戦いの中から新しい時代が切り開かれて来るといった時代です。こういった場合に、どういふのかな、やはりそういう意味でみたら、一つのマルクス、レーニンの言語じゃなくて現実の今の青年が生きている、或いは労働者が生きている悩みの中で、人間的ありようとか、政治の基準とかね、そういうものを打ち出していかなくやならない時代にきてるといふ風に思うんですよね。そういう意味では、マルクスや、レーニンの言った事の内容を今の現実の社会に照らして言い換えて説明し、解析し、その中で展開していかなくやいかんと、こういう時期になっているんだろうと思うんですね。

で、だからといってマルクスやレーニンの言っている事は無内容で意味がないといったそういう事じゃなくって、それを僕らがどの程度まで70年闘争のその後退期の中でね、咀嚼し直して、自分の物にして、自分の拠り所として、そして、それがみんなの拠り所となるようにして、進めていかなくやならんと、こういう風に思うわけです。だけど、ここに集まっていられちゃうね、関西ブンドの先輩や仲間たちというのは節を曲げずにね、そういう方向で進んでいってんじゃないかと、いう風に思います。

で、まあそこで、今度は僕の赤軍派の問題も言わしてもらえば、連合赤軍問題っていうのは、僕、はっきり言ひまして関西ブンドの政治学というのか政治思想の、連合赤軍というより赤軍派と言ってよど号もあれば、重信さんたちの戦いもあり、獄中闘争もあり、いろんな戦いがあった中でのそういう問題を含めた全体の赤軍派の戦いっていうのは、僕は関西ブンドの路線の帰結であったと、いう風に思っております。それは、とりもなおさず、関西ブンドの栄光と悲惨を含めた集大成であり、赤軍派はそれを体現していったと思っております。それに対して、自分は誇りをもっています。

この関西ブント、赤軍派の闘いを、それが全部間違いであったとか、いう形で、切り捨てるつもりは全くないわけで、この事を僕らが戦った意義をきちっとふまえながら、それをどう乗り越えていくのかと、いう問題として、マルクス主義のとらえかえしというか、読み返し方というのかな、現実には照らしてのマルクス主義の運用、創造的發展とかがなされる中で、人間の

問題や、日本社会の歴史や文化やらね、民族の問題とかそういう問題、そういう中での新しい、21世紀のね、やはりプロレタリア革命というのが進展していくのではないかと、いう風に考えるわけです。

ですから、中島さんの意思を継ぐという事はそういうようなマルクス主義の、僕の言葉でいったらちょっと僭越かもしれませんが、「マルクス主義の超克」というのか、そういう問題の観点を持ちながら、戦っていかなくやならないんじゃないかと、いうふうに思います。で、まあここに集まったみなさんは、言ってみたら、レーニンが第一次世界大戦の時に苦闘しながら、ロシア革命を迫及したツインメルワルト左派のね、集まりのように思われるのです。いろんな社会の情勢は転換し、いろんな不利な状況もあるば、有利な状況もある中で、新しい状況の中で新しい時代を切り開いていく、左派として今後戦っていくのが、中島さんの意思を継ぐことではないかという風に思ひまして、発言を終わりたいと思います。

70年安保闘争における教訓と僕の未熟性の自己批判、 「マルクス主義の超克」を実現するために

2006年1月29日・塩見孝也

<序> 中嶋さんら関西ブントの流れは、今何処に立っているか？

(a) 青春、学生運動時代の中嶋さんと僕

63年、学対の指令で同志社支部に張り付く一僕を年下なのに、親しみを込めて「おっさん」といってくれる磊落さ『「社会主義」「世界革命」「プロレタリア独裁」「暴力革命」らマルクス主義の原則を言う必要がある』という中嶋流レーニン主義の豪快な提起、「俺の意見は…」という言い方に見られる自主独立の気風、「よくやった」の言い方の豪快さ、武士的な独立自主、覚悟、周到の問題の立て方。

僕が獄にいて知らなかった70年以降の彼の論文を読んで見て、彼が自分の政治主張に忠実で、客観的には(?)、僕等赤軍派の動向を注視し、精神的、思想的に同伴してくれていて、

僕等を理論的に補強してくれたことが良く分かる。僕は70年以降の、彼の理論活動の苦闘を我が物にして、共有したい。

(b) 中嶋さんの「世界同時革命」の提起、当時の時代にあつて、もっと秀逸であった関西ブント政治学の画期、精華。

僕の「過渡期世界論」は、これを僕流の「歴史観」と「プロレタリアートの能動性」の観点から継承、その他ブントの良きものを集大成した、と言える。

後に唯軍事主義に流れたが。

関西ブントの政治学、理論と実践の統一、知行合一、この実践哲学から「政治過程論」、「第三期論」、「世界同時革命論」は生まれ、この流れから、(=、→)「過渡期世界論」は生まれた。

(c) 関西ブントの経済学や哲学—関西ブント潮流はどこまで到達し、今何処に立っているか？

12・18ブントの資本主義批判の画期性、講座派と労農・宇野派を越える内容を学者ではなく、革命家が獲得したこと。この方向でよい。これを、ベースに、人民大衆中心思想が、基礎付けられてゆく。

しかし、ここまでで、ここから、完全に思考停止している。特に、哲学、思想的営為を系統的に蓄積して行く分野での思考停止が著しい。関西ブントの最も得意とする分野の政治学でも停滞している。

実践はあるか？ないのではなく、ある。極めて、多様な分野で実践している。それが、これまでの予断と偏見の穴倉から出られず、不必要な壁を築き、

事実認識や共同実践に於いて蛸壺化しているから、成果が総合されていない。

蛸壺から出て、率直、フランクになり、愛と信頼の実践共有の関係を築いてゆこう。

新聞さんの、ローザ研究、グラムシ研究、市民社会が確立した社会（膠状の社会）での、陣地構築という現代革命の基本視座は、我々の基本視座の一つであるべき。途上国の革命、カストロ・ゲバラ、パレスチナ、毛ら中国、アジア革命は機動戦、学ぶに足るが、基本的限界があり、金科玉条には出来ない。

この見地も踏まえ、その上での、具体的な方針、路線を、新たな段階としてのグローバル独占資本主義の分析の研究や日本資本主義の普遍性と特殊性、従属帝国主義論の認識、分析に結実させる。この観点から、統一戦線論の研究、その実践に持ってゆくのも一つの選択肢であるのではないか？

工場評議会運動、生協運動、知的道徳的ヘゲモニーの涵養の問題などもあるが。

従属帝国主義認識は、日本永続革命（連続革命）における、基本性格、階級の諸関係、統一戦線戦術を措定する基本ベースとなる。

第三世界、途上国の革命形態としての起動戦と質、水準の異なる陣地戦の視角、僕等は機動戦に流れた傾向があった。

実践を日々対象化する協同の場所や方法を獲得

すべき。要は、真面目に政治討論をする、出来る場所を、獲得してゆこう。

哲学は、マルクス、レーニンの見地の忠実な継承（黒田派との対決の立脚点、藤本進治から学びつつも）、これは、前提だが、「フォイエルバッハ第六テーゼ」や「ドイツ・イデオロギー」のままではいけない。

塩見の言う自主論の領域が必要。或いは、政治学では、特に、民族論（国家論、統一戦線論などを含む）が必要。

ここから、「マルクス主義の超克」、「マルクス主義の日本土着化、日本化」が確立されなければならない。ここが、確立されない限り、人間中心思想やしっかりした民族論は確立し得ない。

(d) 「世界同時革命」の覚書、正確には「世界・一国同時革命」

世界と一国、実念論と唯名論、「世界から捉えつつも、一国から出発する」、マルクス「宣言」の「さしあつたって、自国のブルを片付ける…」の重さ、捉えなおし、レーニンの「ヨーロッパ合衆国（同時革命）創建の一環としてのロシア革命、そして、実際のロシアの実践においては、ロシア社会の普遍性と特殊性を総合した2段階連続革命」、毛の「マルクス主義を自国の実際に適用する」との関連で考察する。

<第1章> 僕の自己批判 僕はこれまで30数年間、何度も、機会あるごとに、自己批判してきたが、要約すれば、人民大衆中心の思想の軽視、唯軍事主義（軍事至上主義）偏向の自己批判、ここが核心と思っています。

人民大衆中心思想の弱さ。民衆サービスの思想の弱さ。資本主義批判の弱さ。労働者ら人民大衆中心思想の弱さ。

かつ、その思想的、哲学的核心としての、労働者ら人民の“人間性”の未確定、曖昧性、人間の本性が自主性（と和）であり、その自覚の弱さ、自主性の本質、その人間の最深部の規定をしっかりとし、そこから全てを捉えなおす。人間性とは「人間の命を最高尊貴し、その命を輝かせる自主性（＝協同性）」と思う。

我々は、唯物論者であるが、意識のウエイトも大切にす。

しかし、物質と意識の関係において、物質的諸

関係に対して、「主体性」と稱して、意識の役割を超観念的に超肥大化させ、結局は観念論に密通してゆく「主体性」論に対して、自主性を持った成員と集団の関係、個と集団の矛盾を踏まえた一致を目指す、意識を社会性から措定する「場所」哲学から出発すべき。

ここから、人間性＝自主性を措定してゆくべき。ここにおいて、我々は、人間をタダモノとしかみない、スターリン主義の「弁証法的唯物論」哲学とは、もちろんのこととして、黒田哲学—革共同哲学と根本的に相違する。

<第2章> ①と同じことなのだが、民衆の歴史的な社会生活単位としての民族と国（くに）を愛することの弱さ。

我が国の歴史への通暁、文化と伝統への愛と革新の自覚の弱さ（ここも決定的核心）、ここから、変革の最大のアポリア、最核心を解決して行く。

民族と国を愛することを、人間自主（日本人のもつ独立・自尊と和＝協同の気風）、民衆中心で人類的観点、世界人民の利益、福祉、諸民族の共和、共栄、宥和の観点から実行して行く、（特に、統一戦線思想の欠落）

人間の自主性、世界・人類の利益の観点を押さえつつも、まず、自国民衆、民族を尊重し、愛し、日本の民衆の歴史を良く知り、文化、伝統を継承、革（か）えてゆく（自主性、愛、信頼、義、徳、死生観らを機軸に）

<第3章> 統一戦線、軍事、党と人民大衆、民族の総括の諸要点。

日本独占資本主義が、戦後「従属帝国主義」を特質とする最新のグローバル独占資本主義であり、日共の描く「従属資本主義」でもなければ、ブント系が描いた、「自立帝国主義」でもないこと、ここから、現代革命としての統一戦線戦術、反米愛国統一戦線の可能性、現実性が存在していること。

<第4章> 70年安保闘争の総括と現在の反安保闘争（反改憲闘争）との比較。

何故30年間の大後退、大転換があったか？

・中国の大路線転換、帝国主義が、その第3段階目のグローバルズム段階への到達（人類史の新たな発展段階への到達、客観的要因）

・日本民衆の未熟性、マルクス主義の歴史的

限界—マルクス主義の超克の余りのもの至難性故に、主体的な全面的総括には長い時間が要った。（主体的要因）

○人間観、哲学、思想、倫理、○統一戦線 ○軍事 ○国家論 ○組織論

<第5章> 現代のツインメルドワルド左派を創出するために！

軍事・武装闘争の選択は、あるパラダイムからすれば、相対的判断であった。選択した人、しなかった人、いずれにも、それなりの理があった。しかし、マルクス主義を誠実に信奉するものであれば、当時の主・客の歴史的事情からすれば、とりわけ、当時の我々全体にあった、主体的な未熟性とマルクス主義の歴史的限界を前提にすれば、武装闘争の採用は必然であり、そして、その何らかの形、質での敗北は殆ど避けがたかった。これは歴史的必然であった。僕は、この悲惨を含めた、闘いを栄光と考え、諸過ちを素直に反省、責任をとるが、僕らの戦いを恥じない。反対に名誉ある事柄として誇りとする。

そして、この観念に立てば、非マルクス主義、反マルクス主義に立つ人ならばいざ知らず、闘いの歴史的限界、欠点、未熟性には、日本と世界のマルクス主義思想、世界観の当時の歴史的限界に負う所が大いにあったことも、確認しなければならない。このこと、つまり、「マルクス主義の超克」こそ、総括の核心問題としてしっかりと、把握されなければならない。

それは、ともかくとして、いったん決起した人々にとっては、「闘いの歴史的意義をしっかりと、踏まえての、その歴史的、主体的限界をどう克服するか」であり、武闘清算主義でもなければ、武闘教条主義であってもならない。そして、

当時、いったん選択し、全存在を賭けて闘った以上、闘った人々は、そのことに誇り、名誉と責任を持つべきであるし、実際、誇りを持つ。けっして、「武器を取るべきでなかった」などの清算主義を言うべきでない。

また、限界、欠陥を正視しつつも、その歴史的意義、経験を踏まえ、その限界をどう止揚するのかの原則的立場、観点、方法を僕等はしっかりと踏まえるべきである。

我々は、この経験から、何を学んだか、何を学ぶか、である。この経験、教訓をしっかりと意識化し、未来に向けて、どう前向きに前進するか、どう団結するのか、の姿勢をとるべきである。

歴史的意義、経験とは、ベトナム侵略戦争に勝利したこと、憲法改悪などさせなかったこと。軍事、武装決起の経験、国際主義の実行の経験、地下闘争・獄中闘争、被弾圧の経験、非転向堅持経験、軍事至上主義の誤りの経験とその過ちをすみやかな是正、路線転換し、名誉を保ちつつ、退却していく経験、敗北に打ちひしがれず、不屈に戦いを継続してきたことの意義、等である。

我々は、武器を取らなかった人々を、とやかく言うつもりはない。又、そこに一定程度ある、妥当な道理を学ぶし、団結を求める。しかし、武器を取った人々を、その人々がプレーヤーノフみたいに、体制、権力を利する形で「武器を取るべきでなかった」ととやかく非難し、その誇り、名誉を誹謗中傷するとしたら、それは、容認できず、断固として反批判する。<第6章> 僕等の目指す党風、党観について 人間性の凝縮である、革命家としての政治生命を持つ黨員革命家をやたらと除名すべきでない。たいした過ちでない人はもちろんのこと、比較的大きな過ちを犯した人でも、その人の政治生命を尊重し、その生命が、再び輝くよう最大限の配慮を払うべきである。常に大義から問題を立て、堅忍と抑制に基づく、同志を信じぬく寛容の作風、組織における、成員の地位と役割を常に正しく定めてゆく全員の気配り。

関西ブントは、そのようなおおらかな（他面でアバウトな）党風を自覚していなかったが持っていた。

同志を自己の目玉のように大切にし、尊貴して行くべきである。

第2次ブントは、明大闘争における除名を慣習にし、マル戦派の引止めの失敗除名、そして、赤軍派グループが自己批判し、復帰を申し出ているのに、それを拒否し、除名した。

この、三つの事件における対処の過ちが、第2次ブントの党的生命力を奪ってしまった。

日共的「一枚岩の党」や「革共同」的、「宗教的指導者への帰依」の宗派主義的党風とは違う党風を確立し得なかった。

その結果、9回大会は実質を伴わず、「党」を言えば言うほど、細分化し、ばらばらになり、分解していった。

後には、尊敬や信頼に替わって、憎悪と敵視の関係のみが残っていった。

このことは、赤軍派の因を帰することは、決して出来ない。

「武闘を唱えなかったから、自分はまともだった」言う人が居る。

しかし、党内闘争では、武闘を無原則に行い、殴り（M君やF君）、リンチし、拳銃の果てには、同志（M・J君）を死に追いやったのではないか。「権力に向かわない、武闘派」も存在したこと、このような武闘派も、しっかり反省すべきである。宮廷政治で対話不能な状況を醸し出した問題もある。

民衆奉仕の基準がない。資本主義批判（人民大衆中心、人間中心）無き、「自立論」は、アナキスティックで徒党的なままでありがちとなる。

様々な問題を、まず己にひきつけて、反省する思想的営為が必要でなからうか？

人間、革命家は正しいこともやれば、過ちも犯すのであり、「無謬の人」は居ない。過ちを出るだけ、大きくせず、少なくする、あくまで人民大衆中心、人間中心で、集団の英知を発揮できるようにし、過ちを少なくし、過まてば、二度と繰り返さないように、改める党風を確立すべき、ではなからうか。

<第7章> 僕の革命・維新の党のイメージ、8つのスローガン、当面の重点目標と方針の環について

(a) 僕の革命党イメージ・八つのスローガン
世界平和・人類福祉の党
愛国の党

民衆中心・人間中心の党
国際主義の党
徹底民主、共和・資本主義の害悪是正の党

同志を自分の眼のように尊貴し、愛し、やたらと除名しない党

自分と認識や発想の全く違う人々とも共闘出

来、民衆と民族の英知を汲みつくせ、統一戦線を駆使できる党、

日本人を愛し、そのいのちを革（あらた）める党、

徳高き信義ある日本を！

(b) 当面の最重点目標

日米安保廃棄・反米愛国！アジア・世界との共生！

憲法改悪阻止！

徹底民主、共和・資本主義の諸害悪是正！



◎高橋 道郎～

62年東北学院大学入学

63年「学生会」委員長

63年日本キリスト教系学生連合・委員長

66年東北大学院入学

66年共産同第6回大会・中央委員

68年東北大学大学院「院生共闘」

○「東北地方委員会よりの報告」(『共産主義』14号)他。

◎現在「東ティモール日本文化センター」代表

東北、仙台で生まれ、仙台で育ち、1962年東北学院大学経済に入って学生運動を始めました。東京では、かっこよかったブントは雲散霧消しちゃって、何か喧嘩ばかりやっている。ところが関西では、大管法闘争を全学封鎖で非常に生き生きと大衆運動で展開されている。明治大学で行われた全国自治会代表者会議で、先程面白いスピーチをされた関西ブントの田中正治さんがかっこいいアジテーションをやっておられました。こういう人に相談したら道は開かれるんじゃないかな、と思って田中さんと話したのが運のつきで、関西ブントと繋がりが出来ました。

中島さんは、東北のブントや社学同の勉強会に、お呼びしてお話をうかがい薫陶を受けた事があります。みなさんが言うておられるように、非常に骨太の考え方で、「一国革命か世界革命か？世界革命に決まっている！」とか、「議会主義か暴力革命か？暴力革命に決まっている！」とか、原則的な事をズバツと言って、私の育てたいと思っていた東北大学や東北学院大学の若い当時の社学同の諸君にとっては、「中島さんの話はおもしろい」と評判になりました。東北のブントは、関西の方もそうだった

戦争と売国と反動・資本主義害悪氾濫の自民党体制を打倒しよう！

(c) 左右の反米主義者は、英知の限りを尽くし、民族と国の復興を目指し、創造的努力を積み重ね、反米愛国統一戦線を構築してゆこう。

この統一戦線の中に、反戦平和、人権・民主主義、生活防衛と労働者の権利拡大、環境防衛、人間の“壊れ”との闘い等の民衆の諸要求を集約し、実現してゆこう。

らしいですが、マルクスやレーニンの原典をよく読みながら、勉強して運動に係わるという体質をずっともっていたんです。そういう意味では中島さんのお話とか中島さん達が出された1966年の「プロレタリア独裁への道I」の中の序文・論集の白眉である、「日本の孤立観と生産力思想」とか、そういう原則的な思想で書かれた諸論文に大きな影響を受けました。その後の私自身の人生にとっても、また、私たちと一緒に闘った東北出身の活動家たちにとっても、中島さんから教わったことは重い思想的影響を残しました。

特に、挫折したブントの運動を再建するとしたら、「民族国家の重い扉をどのようにしておし開いていくのか」、「この民族国家の扉を打ち破るような運動が出来ないかぎり、私たちの挫折から前に進めない」という、この点については、私は今でも学ぶべきたくさんのお話を聞いていると、考えています。どんな人間でも時代的制約の中にいるわけですから、田原理論にも、正しい点もあれば限界もある、しかし、やはりブントの綺羅星のごとき、優れた活動家の中で、田原芳理論が残したものは、私たちの現在の運動にとっても、それから、これから世直

しの運動に立ち上がってくる若い人達にとっても、貴重なものを残していると思います。岩田さんたちのグループが、非常に困難な中で論集を復刻され、このような会をもって頂いた事に、心から感謝したいと思います。

その「民族国家の重い扉」を押し開いていくにはどうしたらいいか。これにはいろいろなやり方があると思うし、このような社会運動なり、多様な運動がげんに全世界いたるところでさまざま形態で起こっていると思いますが、一人の人間がやれること、一つのグループがやれることはわずかではあります。そういう一つのこと、小さいことでもそれを10年、20年と長く粘り強く継続してやれば、必ず他のグループの考え方運動と結合する地点に到達する。そこでネットワークの輪に入り、ネットワークの力で人類の未来は切り開かれていくのではないかと思います。

私は今東ティモールの支援運動にかかわっています。ティモール島は日本が第二次世界大戦中侵略占領した島でもあります。1986年東ティモール出身の若い女性が仙台に講演に来て、インドネシアのスハルト軍事独裁政権に1975年侵略占領され、人口の3分の1以上が虐殺されたという悲痛な訴えを聞いて、それ以来東ティモールの支援運動を20年ほど続けております。その運動の中で、今取り組んでいる事は、ローカルなものを大事にする運動です。現在人口約100万の国で、地方言語が32あります。それから国語のテトウン語も3種類あります。そういうローカルな言語の辞書創りとか、ローカルな言語で記録した古来伝承されてきた東ティモール特有の四行詩集を、発行するとか、そういう地道な作業です。或いは、東ティモールの民族のテトウン語で東ティモールの主権回復の独立運動の歴史年表を創って子ども達の教科書にする。そういう日常家族が会話に使っている地方言語や民族の言語(国語テトウン語)を活字にして若い世代を教育する運動をやっています。

これは、「民族国家」を解体するときの一つは、地球市民っていうか、人類の一員としてというグローバルな観点から民族国家を全地球的視点から解体していくという方法がある。現に

国境を越えた環境問題が起こっておりますし、インターネットの発達とかで生産力的にも世界が一つになりつつあります。しかし他方で同時に、ローカルな文化、方言とか地方言語とかそういうものを維持し、発展させる事も非常に大事な事である。だから民族国家の解体を、ローカルな視点からと、グローバルな観点からという風に両面から攻めるということです。その両面から民族国家の壁を打ち砕いていく、そういう運動が全世界的に広がっているんじゃないかと、私は考えています。残された人生も東ティモールのそういう運動、非常にローカルなものを大事にしながら、続けていくことがみなさんのなさっているいろんな運動と、ネットワークを創って、明るい未来を切り開けるのではないかと考えております。そういう中で中島さんの提起された民族国家を越えた世界革命の理論、そして今回の田原理論の復刻が大きな役割を果たすと思っております。

ここにお集まりの何名の方にもご協力頂きながら、東ティモールの共同体づくりの基本であります、農業プロジェクトを立ち上げようとしています。有機農業を基本とした、循環型パイロットファーム創りを東ティモールでやれるかやれないかと、調査準備活動を始めています。この関西ブントの中から生まれた優れた有機農業の実践者である、「あーす農場」の大森昌也さんと、大森昌也さんのご長男の大森ケンタさんが、この2月に私たちと一緒に、東ティモールのサメという農村地帯に行き、あるゲリラのリーダーのパートナーの持っている土地を、視察をして、そこで有機農業のプロジェクトを、パイロットファームとしてできるかどうか調査を始めます。そして、またこの調査は、キューバで現在行われて成功しつつある有機農業の運動と結びつけることができる方向をも、探求しています。そういう意味で、大森昌也さん、どうぞ、大森昌也さんに発言の機会を与えていただきたいと考えます。(事前に岩田さんの許可を得ていたが、司会者の許可を事前に得ていなかった私の準備不足のため、大森さんは二次会で発言された。)

岩田さん！困難な中で復刻の実現と今日の会を持たれた事に再度心から感謝いたします。



◎佐藤 秋雄～(羽山 太郎)

- 61年専修大学入学
- 62～63年「学生会」委員長
- 64年共産同マルクス・レーニン主義派加盟
- 68年東京地区反戦連絡会議・世話人
- 69年共産主義青年同盟(キム)・議長
- 73年共産同蜂起左派結成
- 『ブント』(西南社・80年)他。
- ◎現在「プロレタリア通信」「共産主義運動年誌」会員

本日はですね、田原芳さんの論文集復刻出版集会に呼んで頂いて、ありがとうございます。で、主催者ではないんですがけれども、『共産主義運動年誌』というのを、編集員の一人としてやっております。今こういう本で、もしよかったですら差し上げたと思いますので、持って行って頂きたいなど。先程、正治さんも言っていましたけれども、運動などと言うと田原さんに怒られるかもしれないけれど、2000年からいろんなグループや人達の強力、協働で雑誌を出しております。で、共産主義に関する理論や運動についてそれぞれの考えでやっていることを書いてもらって出版していると、で、その主要なメンバーの一人が岩田さんです。

で、ここに参加しておられるほとんどの皆さんは、運動を現在もやって、特に前田さんは72歳と言われてましたけれども、前田さんは現役ですね。前田さんは一生懸命現在の世の中を変えたいという、来年にせまっている参議院選挙含めて、何としてでも現在の状況に一矢報いたいという一念でこれからも頑張っておられます。そうした決意表明も含めて多分みなさんの手元の黄色い封筒の中にも入っていると思うんですけれども、僕もですねそういう前田さんとか、みなさん、先輩方のご指導を受けなが

ら、或いは、一生懸命やってる姿をみながらですね、一生懸命後をついていきたなと思ってます。

で、最後ですけれども、簡単に、田原芳さんが、或いは今日発言の方の中には関西ブントの人が多いいんですけれども、関西ブントの全国化というのはですね、そういう意味では今日から全く新しい意味内容を含めて第一歩が始まるんじゃないかと、そういうふう考えてるんですよ。で、その田原芳さんの意思を引き継いで全力で突っ走ろうというのが、若い岩田さんです。僕はその岩田さんの心意気を買ってですね、僕なんか年寄りだから、年寄りって言ったら僕よりも先輩もたくさんおられるんで怒られるちゃうんだけど、ま、岩田さんから比べれば、ちょっと年長かなということで、岩田さんなんかを一生懸命応援しながらですね、これからの共産主義運動の前進のために頑張りたいと、そういう意味では本日は、関西ブントの全国化にむけて、第一歩であると同時に全国政治集会だというふうに思っております。『共産主義運動年誌』編集委員でもある、佐藤秋雄のあいさつとします。今日は、どうもありがとうございました。

★田原 芳論文集出版記念に！

2006年1月29日 佐藤秋雄

第二次共産主義者同盟の主要なイデオログであった田原芳さんの諸論文が、広くプロレタリアート人民の眼にするとところとなり、心よりお祝い申し上げるものです。

「一日が何年にも匹敵するような激動の日々」(1967～71年)の中で、斯くも多様な論文作業を遂行していたとは驚嘆に値します。

さて、私は第一次・第二次共産主義者同盟の

総括を十分行っていません。ただ、時代背景として第一次共産主義者同盟の結成の経過、およびその理論形成については以下のように考えています。

第一に戦後の階級闘争と日本共産党の役割、その前衛党における大衆闘争・学生運動の指導と党内闘争。いうまでもなく、この党内闘争は国際共産主義運動内での理論闘争と不可分でありました。また、これらスターリン主義的共産主義運動と相対的に独自の民族運動と世界政治が「アラブ連合」、インド、インドネシアなどとして形成されていました。しかも、より先鋭的な形で民族解放闘争をアルジェリア、インドシナ、ベトナムでフランス帝国主義に対してたたかっていました。これらは、必ずしも「階級闘争」としてくれない国際階級闘争であったことを忘れることはできません。以上の「国際・国内階級闘争と理論闘争」。

第二に、日本資本主義の復興を抜きに共産主義者同盟の結成はなかったのではないのでしょうか。いわゆる「朝鮮戦争」を前後して占領軍の政策転換とあいまって、「反共国家」へひた走っていたのが日本独占資本の形成です。レッド・パージを始め、警察予備隊、保安隊・自衛隊、破防法、自治体警察の廃止と中央集権。ここに、岸信介の「親米独立」・「新日米安保」・「双務協定」の意味があると思います。こうして、「新安保」の「イキ」とは日本資本主義の帝国主義的復活を意味する「双務」と位置づけられたのではないのでしょうか。かつて、コミンテルンの情勢分析・帝国主義論は、「全般的危機（一般的危機）」論でした。コミンフォルムとなつてなお、フルシチョフによる「平和共存論」は、むしろ、1917年より1945年以降が「体制間の矛盾」としてより一層強く打ち出すものとなっています。こうした「体制間矛盾論・平和共存」、「歌って、おどって」（日本共産党方針）の“階級闘争”“大衆闘争・学生運動論”から離脱することこそ、ブントの結成ではなかったかと思えます。第二次砂川闘争から60年安保にいたる連続した闘いこそ、まさに、党中央との闘いでもあったと思えます。

第三に、いわゆる「戦前戦後の講座派—労働派」と相対的独自、またはその当初よりイデオ

ロギッシュにマルクス主義に接近してきたグループ、個人が1956年以降、第4インター日本支部・『探求』などとして姿を現してきます。このグループ・個人は、必ずしも大衆・労働者・学生を捉えていなかった。とは言え、たとえ少数であっても理論・党派闘争と言う観点からすれば無視し得るものではありませんでした。

同時に、日本共産党は第7回大会を組織する渦中にあり、1957年第二次砂川闘争以降、学生運動はほぼ学生細胞の指導するところとなっていました。「六全協」による大同団結は、第7回大会に向けた党章問題を巡っても党内闘争は激化しており、1959年ついに『現代の理論』として姿を現しました。第二次砂川闘争から全学連の再活性化と再建は「反戦学同」から社学同への名称変更とともに始まります。しかし、この全学連の再活性化・再建運動は、党中央、『現代の理論』、第4インター日本支部・探求派などの理論闘争・党派闘争として闘われることとなります。日本共産党中央は、学生細胞指導としてとどまっていた東京都委員・地区委員の除名を決定します。いわゆる「6・1事件」は、格好の処分理由となり党内闘争の道を断たれた若き共産主義者は別党コース・ブント結成に至ったと考えられます。ブントの結成とは、自ら進めてきた「運動と情勢と党内・党派闘争」に規定されたものであったと言うことができます。従って、共産主義者同盟は、内在的内発的なものとして結成されました。第4インター日本支部・探求と根本的に異なる点であろうかと思えます。

しかしながら共産主義者同盟は、60年6月19日の自然承認と岸信介の退陣によって、闘争目標ばかりか、前衛党建設についてさえ確固たる指導部と政治理論を形成することは出来ませんでした。簡単に私の立場を述べておきますと次のようになるかと思えます。

共産主義者同盟は第5回大会（1960年7月）「60年安保闘争」の総括をめぐって紛糾し以後、中央は三分裂し解体しました。第5回大会後に東大細胞意見書として提出された内容は「第三次綱領」批判でした。60年安保闘争の総括に始まって「第三次綱領草案」批判と

は、政治局と全学連書記局批判を成していたのです。ここに「プロレタリア通信」派（政治局一部と全学連書記局）が結成され、ついで『戦旗』派の形成によって、あらゆる意味でブント中央の統一性は瓦解しました。「プロレタリア通信」派は第三次綱領草案防衛の観点から形成されたものであり、ブントの再結集と池田内閣打倒を呼びかけるには不十分であったと言わなければなりません。ただ言えることは「第三次綱領草案」はブントの一つの公式文書であったという限りでは、後世の我々もまた検討の対象でありました。第一次共産主義者同盟、第5回大会後の『革命の通達』派を始め、「プロ通」「戦旗」派、いずれも党内闘争を組織できなかったと言うこと。そうしたことから第二次ブント（1966年9月）は、ある種の断絶、非連続・連続のうちに再建されなければなりませんでした。

第二次共産主義者同盟は、「四分五裂」したとは言え、いまだ進行中ということもあり別の



◎味岡 修～(三上 治)

- 60年中央大学入学
- 62年社学同全国委員会・委員長
- 63年「学生会館闘争」退学
- 65年共産同(統一委員会)・中央委員・学生対策部
- 68年共産同第7回大会・中央委員(立候補)
- 70年共産同叛旗派結成
- 『戦闘の指示向線』(現代思潮社・72年)他、多数。
- ◎現在「著述業」

久しぶりです。味岡です。三上といってもどっちでも構わないのだけど、田原さんの本の書評を書いてくれたというので、一応『情況』雑誌に書いてますので、内容的なことはそれを読んで下さい。ちょっと思い出話と、一、二を話したいと思えます。その前に、今日の話聞いての感想を言わしてください。僕も革命の事は考えているんですけども、マルクスとかレーニンとか、そういう事を前提とした考え方はやめたと思っています。はっきり言って、僕はマルクス主義者ではありません。で、そういう思考は歴史的な古典としてあります。歴史の中の革命の一つとして、ロシア革命、中国革命とありますが、あれが革命の全てではないので

機会に譲りたいと思います。ただ言えることは「主義者」の統合・団結という限り「主義者」としてのイデオロギー・理論闘争を媒介するのであって、「〇〇派の全国化」「〇〇の理論」の同心円の全国化の展望は、必ずしも人々、プロレタリアート人民の思想や感情を組織するもので無いことを、我々は教訓としまなければならないと思えます。

世界革命—共産主義運動に教科書が無い以上、理論・組織闘争の伴うことは自明であります。しかし、この党内・党派闘争をどのようなモラルの下で組織されなければならないか。これこそ、共産主義運動における根本的哲学上の問題、政治組織理論でなければならないと思えます。

本日は、かくも多数の友人、知人にお会いできたことを嬉しく思います。

田原芳さん流には「関西ブントの全国化」は本日をもって新たな第一歩となることでしょう。

す。そうしないと、我々が現実に生きている場所から物を見る発想には到達できないのではないかと、という点で違和感があります。

僕が、田原さんと最初に会ったには、確か全学連の第16回大会だったですね。その両国会堂で行われた大会があったんです。その時に、浅田君と一緒にいたんですか、関西ブントの代表で来られたんです。僕らは当時、飯田橋にあるつる屋という旅館に集まって、対中核派との闘争をやろうとしていたんです。早稲田大学にいた下山保という解放派が親分で、僕がサブみたいな位置にいて、全学連大会に突入したり、たたきだされたりしたんです。

それから、付き合いが始まりました。それ以前

にも中島さんとあったかもしれないんですけど、記憶にあるのはそこからです。関西ブントとの付き合いが始まったわけです。

個人的には僕は60年の時に、大学一年生でマルクスもレーニンも読んでなくて、とりあえず、安保闘争に突入して、その合間、合間にその手の文献をチョコチョコ読んでたように、急進民主派みたいところで戦っていました。夏休みから帰ってくると、ブントは解散状態になっていました。先ほどの田中さんたちは違って、東京では、僕らはブントに入れてもらえなかったんです。僕らは社会学部しか入れなくて、上でこそブント会議やってると思ってですね、戦術は上から決まるんだと。非常に癪にさわったんですが、ブントには入れてくれなくてですね、社会学部だったんですけども、それで、ブントの連中に一体どうなってんだと話を聞きにいったら誰も答えられない。革共同の勢いが非常に強く、東京では黒田寛一の理論がそこそこの影響力があったもので、これじゃやばいという事もありまして、個人的には吉本隆明を尋ねました。吉本隆明や三浦つとむや谷川雁達から、かなり多く理論的影響を受けました。彼らの思想は、マルクスやレーニンとはちょっと違った場所にあって、そういう薫陶を受けてきたというのもありました。僕は塩見さんから「マルクス主義に一度もなった事はないよね」と言われて、「あ、そうだ」と言ってるんですけども。そういう思考で育ってきたんです。

そういう中で、関西ブントの人達と付き合いしたのは、中島さんたちですが、僕が三重県生まれで関西の人達とは、結構、親近感もあったというのがあります。それだけではありません。当時の学生運動は、東京の連中って政治的かけひきに長けてて、すれておもしろく無いという感じがありました。新開さんと清田君とか、関西の人達とつきあった時にですね、なんだかすごく感じが良かったんです。で、今思うとそれは正しかったと思うし、学生運動の中で、そういうすれて無いてというのは、非常にいい資質だったと思います。僕がいた中大ですけども、中大の連中と関西の連中は、構改派の連中や他党派の連中も含めて仲良かったのは、そ

ういう感じあったからです。ですから、学生運動の中の党派の関係とは別に、そういう関係があったのですが、その事は間違いじゃなかったというふうに思ってるんです。政治は政治の場であるんだけど、人間的な関係からいえば、そういう意味で、今でも何となしに、「関西ブント」というと懐かしい感じがします。64年の頃に関西ブントの東京都委員会というのを、僕と堀米君という民主党の衆議院議員になった二人で立ち上げたんですけど、ま、あまり成功はしなかったんですけどもね、そういう事情がありました。

中島さんの本を読みながら一つだけ気になったのが、僕らの原点である、60年安保闘争の6・15から6・18の過程をどう総括しているかっていうことです。6月15日に、僕らが国会構内に突入してですね、かなり激しい闘争やりました。そして、6月18日には何も出来ずに終わりました。それが、その後の総括の中心になりました。とにかく国会へ突入して、一つの新しい運動の形を切り開いたんだという誇りと達成感と、何かありゃゼロだというこの考えの極端なずれみたいなものが当時あったんですね。政治党派やその場では、ロシア革命がどうか武装闘争がどうかという議論が出るんですけど、6・15を一番頑張った学生に意識では、暴力革命とか武装蜂起とかは無い。そうで無いけれども、あの闘争が切り開いた意味があったし、その後の急進的な運動に大きな影響を与えたわけです。だから、その運動を左翼がそれを解釈する側と、その運動が構成していた学生たちの内在的意識の間には、ものすごい断絶というか落差があったんです。

これはですね、多分左翼だけでなく、日本人が普遍的に国家などを考えようとする、中国の言葉を、ある時はヨーロッパの言葉を輸入したものと、自分たちが生活実感でもっている感覚とのものすごい落差を感じるのと同じです。本当の意味で、その自覚がなかったんです。そういう意味では左翼思考も、官僚のエリート主義の延長の中にしか存在しなかったのではないかという、批判があるわけですよ。左翼の思想というものを根本的に変える革命をしなかったら、自由民権運動もしかり、戦前の大正デモク

ラシーもマルクス主義もしかり、戦後の左翼運動も同じだった様に、歴史を繰り返すんじゃないかと思いました。だから僕らが、60年から闘った意味はそういう延長上じゃないところで、人々の生活意識や我々の思考様式の中に与えたところで、確実な影響力をもっていて、それをどう発見するかって事がないと、今後の我々の運動につながらないではないかという事を考えています。

もう一つだけ言いますとね、左翼運動の中で僕が負けたという、これが一番問題だったなというのがあります。権力についての考え方です。そこが根本的にだめだったんでないかと。当時、マルクス主義では、誰が、どの階級が権力を握るかという考えでした。階級対立があり、階級を維持するための道具として権力があるっていう考え方です。権力自体の構造がどう変わるべきかと、権力の構造がどう変わる事が革命かっていう考え方がなかったんです。フランス革命が、何故、テロを生んだか、ロシア革命もテロを生んだって事に対する歴史的な反省ですね。それを、運動の中でやれなかった。このことの問題は、内ゲバ問題になったし、やはり左翼のテロリズムになったわけです。現代のテロリズム批判につながります。テロリズムを乗り越えた形で問題を考えるときに、権力論というのはとても大事なんです。権力は誰かが握れば良いというのではなくて、どういう形の権力にするかというのが大事なんだっていう考え

方、権力のその構造や構想を変えようという、そういう考え方に立っていきたくて思っております。

僕も昨年まで政治運動をやめた後、「聚珍社」という、編集プロダクションみたいなのを一応やってたんですけども、会社を辞めまして、今年からは、本格的に政治運動やら文筆の世界に帰ろうと思っています。さしあたり、僕と栗本慎一郎さんと年二回くらい雑誌を立ち上げます。「流沙」というんですけどね。60年世代が考えてきたことを、きちんと残そうと思っています。東京で憲法の『主権在民の会』というグループにも加わってますから、大衆運動も立ち上げていきたくて思っております。左翼運動や革命運動に、年齢は無いのでやっていきたくて思っております。

僕は田原さんの書評を書いてちょっと思ったんですが、田原さんを偲びたいのは彼の志です。田原さんが書いていた原稿、僕らもそうですが、やはり記号の世界の残骸みたいなところがあるんです。当時の我々が使わざるを得なかった言葉の制約というのが、政治的言葉にあるんです。だからそうじゃなくて、彼が書いた言葉の背後にあった、想像力や感性みたいなものをね、復活しながら読みたいと思います。そうすると、田原さんが実現できなかった、未完で終わった思想を、どこかで引き継いでいきたいという点で連帯感があります。そこは十分活かしていきたくて思っております。以上です。

懐かしさとある種の痛ましさと

～一つの遺産として 田原芳論集から～

12月20日 三上 治(『情況』1・2月号掲載)

僕が田原芳にはじめてあったのは1961年の全学連大会の前日であったと思う。それ以前にもどこかで会っているのかも知れないが、記憶としてははっきりしているのはこのときである。1960年安保闘争を担った共産主義者同盟(ブント)は、前年に開かれた第五回大会を最後に分裂状態から崩壊状態に入っていた。全学連の主だった幹部連中は革命的共産主義者同

盟(革共同)に移行していた。60年の暮れに、プロ通派の清水丈夫や北小路敏らが移ってそれはほぼ終わった。地方のブントはともかく、東京や関西の下部の活動家はそのまま大学などの単位で独立左翼グループとして残っていた。

全学連の幹部の移行に伴い全学連のヘゲモニーは必然のように革共同に移行していたが、その確認の儀式のような大会が第十六回全学連

大会であった。これは両国会堂で開かれた大会であるが、奇妙な大会であった。日本共産党が指導する全自連と呼ぶグループに対しては、1960年の安保闘争時の全学連主流派として結束する一方で革共同との対立は激化していたからである。革共同が反対派に対して、ゲバ棒を持って対応した悪名高い大会でもあった。

革共同に反対のグループは、飯田橋のつる屋という旅館に集まり共同の戦線を引いた。つる屋連合といわれた記憶がある。多分、早稲田(大学)の下山保が社青同解放派を率いて全体を仕切り、僕がブント系を代表してサブ的位置にいた。中央大学のブントは安保闘争後も独立ブントとして活動しており、力もあったからである。このつる屋で僕は田原とはじめてあったように思う。彼は京都府学連の代表として参加してきており、挨拶もしたように思う。これから彼とは長い付き合いがはじまるのだが、それは関西ブントと呼ばれる面々との付き合いがはじまることを意味した。

1960年代の初めのころ、僕は関西ブントの連中と比較的仲がよかった。確か関西ブントの東京都委員会を作り上げもした。これは後に民主党の衆議院議員になった堀込征男と一緒につくったが、たいして機能もせず終わった。このことは関西ブントの面々と中大の活動家たちが親密な関係を作っていたことを意味する。関西ブントの連中と親しかったのは、僕が関西に近い三重の生まれであることも影響しているが、東京の活動家に比してスレてないと思っていたのである。東京の活動家は安保闘争後の政治組織の細分化の中で、政治的な陰謀術だけが長けたスレからしが多いと思っていた。それに比べると関西ブントの連中は政治慣れしていないと思えたのだ。この政治慣れしていないということは学生運動では良き資質を意味した。この直感と印象は今でも正しいかと思う。安保闘争後も関西では、大衆的な運動が残っていてそれは活動家の質にも反映していた。

田原のこの論文集を手にして思い出したのは彼にはじめてあったころの懐かしさであった。彼の人懐っこい笑顔を自然に思い出したのである。思い浮かんできた笑顔は僕らの経てきた時代の記憶を蘇えらせる。それだけでもこの本は

価値があると思った。本当は書評というより未完で終わった彼の思想活動を偲んでみたい。言葉を超えて僕をよぎっていくもので十分なのである。

この論文集に収められている「共産主義者同盟の総括と綱領問題」は、第二次ブントの綱領委員会に提出されたものであろうが、僕もこの綱領委員会には属していた。彼とは顔を合わせ何度か議論したこともある。綱領委員会は1970年安保闘争に向かう過程でブントの根本的方針を提起しようとしたのであるが、これは不毛なまま終わった。

世界同時革命か世界一国同時革命かなどを議論していたのである。この議論そのものが根本的に不毛でこれでは綱領どころでは無いと思っていた。今思うに理由は単純であったように思う。それは僕らが路線や戦略の構築として議論していた言葉と行動に自己を組織していく言葉は乖離して、こういう討議を重ねてもどうにも仕方がないと思ったのである。

第二次ブントはまだ共通の政治組織であったが、内在的な共通点は既に喪われはじめていた。記号のような政治言語がそのために膨らむのであるが、行動を支える共通性の喪失に危機感を誰しもが感じていた。そしてもうこの種の政治言語ではこの危機感を救える状況にないことははっきりしていた。赤軍派の登場はそれを一層はっきりさせただけであった。

この論文は当時の包括的な総括文章であり、よくまとめてあるが、これが当時の活動家たちの内面の声にどこまで届いたかには疑問がある。これは同じような文章を書いていた僕自身に向けた疑問でもある。僕も似たような文章を書いていたのだ。もし田原が生きていればそのころの話をしてみたいと思った。歳月を経てそのことへの反省が深くなっているが、生きていれば共通の認識に達しているだろうと想像できるからである。僕らがそれ以外に思いつくこともできない政治言語として僕らを支配していたものについては、僕は田原と話してみたい誘惑があるものだ。

田原はこの論文を第一次ブントの総括から始めている。僕も最近、「記憶への旅 1960年6月15日」(HP「三上治の世界」掲載)で、

この当時のことを振り返ってみたが、そこで痛切に思ったのは僕らの内在的な意識と政治的な言葉のずれであった。ずれというか、乖離である。当時の政治的言語と、行動する主体の内在的意識の間にあった乖離が気になったが、それはある意味で現在の政治思想状況に接続しているのである。僕らは内在的意識の支えで行動し、その集合が政治行動を形成していたが、それを析出したり、解釈したりする政治言語は別の宇宙の言葉のようなものだった。それは外からの言葉の解釈であった。

宗教集団に入ればそこではその集団の言葉が何の疑いもなく流通するように、左翼集団では独特の言葉が流れていた。そして左翼の政治集団で流通し、その内部ではそれが普遍的であることが少しも疑われなかったのである。世界という言葉を使えば、世界を認識していると疑いもなく思い込んでいるようなものである。革命といえば共通のイメージをさすと思い込んで、そのことを疑わないでいた。1960年の安保闘争後に出されたおびただしい総括文章はその類である。行動する主体の存在や内在的意識を対象にし、またそれに届いている文章などはほとんどないのである。

1960年の6月15日から6月18日の過程の総括をめぐり第一次ブントは分裂するが、同じことを第二次ブントは赤軍派の登場を契機に経験する。第一次ブントの安保後の分裂を、今度は70年安保前にやったのである。この本でも分析されているブント各派のこの過程の総括は、6月18日に6月15日を越える闘争をできなかったというところに絞られていた。そして、ブントに政治的準備があれば、それを乗り越えた闘争は出来たはずであるというところから観点はだされている。願望としてブントの活動家にそれがあつたとしても、行動する主体の意識や存在感の方からその可能性があつたかどうかは、振り返られていなかった。活動家たちが6月15日の行動の中でも醒めていた面は、総括の対象になっていないのである。

「政府危機を政治危機」へとか、「決戦」という言葉がやたら出てくるが、6月15日の行動の中でも醒めていた主体の問題はどこにも現れ

ない。僕らが1969年から1970年にかけて演じたことは、既に1960年の6月15日から18日の過程の中に存在していた。僕は田原がどこまで意識して、この総括文章を第一次ブントの安保闘争の総括過程から始めたかわからないが、無意識にせよそのところに視線はいていたのだと思う。

6月15日の国会構内占拠の行動はあれが限界であり、どんなに願望を抱いたところで、あれ以上の行動は不可能であった。それは政治言語の急進性で乗り越えることはできないものだった。政治行動が、政治言語の扇動で成り立つと考えるような頓馬な思想を持っていなければ、すぐに見抜けるものである。ブントの活動家が観念(政治言語)の中で蜂起や武装決起を夢想しても、それと6月15日の行動が結びつくはずはなかった。政治行動を総括したり、理念的析出するときに介在する政治言語の夢想的性格を、当時の思想水準では自覚できなかったのだとしてもである。

6月15日の行動を支えた行動者の意志(その意志の集合)は、急進的民主主義の意識であり、それは夢想的な革命の像とは結びつかないものだった。活動家の頭の中ではそれは結合しなくても、それは頭の中での接合に過ぎなかったのである。ブントの活動家の頭の中の夢想的革命とは関係なかったが、6月15日の国会構内占拠の行動の革命的意味は存在した。それはブントの活動家が頭の中で描いたものとは別のところにあった。歴史的な文脈に照らして考えればこれは明らかであるが、その政治的意味を理解しえていけば、1960年代の急進的運動の評価も違ったものになったはずである。1960年の6月15日の行動がその後の急進的運動の起源になったものはあつたし、そのように機能したのである。自己の身体に刻印されたもの、そしてその後の行動の範型になったものは当時の支配的な政治言語とは別に析出されるべきものであつた。

確かに、歴史にたらは存在しない。それは十二分に承知の上だが、僕らにとって歴史的な経験は現在も続いているかもしれないと思えば、そこから照り返してくるものはあるはずである。僕は、政治的言語と現実感覚の二重性とで

も言うべき乖離状態に視線を置きながら、この歴史的文章を読んでいるが、それは現在に継続している事柄であるからだ。

田原芳の理論家としての資質はこういう政治的理論ではなく、政治評論の方にあったのではないかと思うことがある。僕の記憶に残っているのは『日本の孤立観と生産力思想』のようなものである。それを手に取ったときの感銘が忘

れられないからである。僕らの残してきた政治文章は記号の残骸のようなどころがある。歴史的文章とはそういうものである。それは政治言語の制度的制約から来る。その残骸の向こうにある、息吹や存在感を想像力で再現して読むしかない。そうはいってもこういう歴史的文章はそうないものだから、彼の残してくれた貴重な遺産というべきなのかもしれない。



◎蒲池 裕治

63年同志社大学入学

64年学友会・委員長(副委員長・藤本敏夫)

66年京都市学連・委員長

66年全学連(三派)・副委員長(委員長・斉藤克彦)

67年全学連(三派)・副委員長(委員長・秋山勝行)

◎現在「日本医療システムプロジェクト(株)」社長

蒲池です。私は63年度の入学で大部分が大先輩で、実際にいろんな形で情報として聞かれたことはあっても、同志社大学の私どもが経験した運動がどのようなものだったかという事については、あまりご存知ないかと思えますので、政治的なことについては、いろんな方が今まで話をされましたので、ちょっと思い出話をさせて頂きたいというふうに思います。

私が63年に入学した時というのは、その前年大管法闘争があつて、とにかく自治会に行ってもほとんど人がいないというような状況で、そこへ急に元気の良い63年度生が突如として現れまして、自治会活動を始めた。63年度というのは、春に原子力潜水艦寄港問題があつて、同志社でも学生大会を行ったんですけども、残念ながら人が集まらずストライキは提示できず、という事で失敗と。夏に、市電市バスの運動がありましたが、とにかく非常に低調な運動で、やっと後期になって学費闘争がございまして、やっと学園闘争が起こり、学内的に高揚するというような状況でした。ところが、その学園闘争の、学費闘争の真っ最中に、学友会

の主流派、実質上は社会学同に対する共産党のリンチ事件が起こりまして、そのリンチ事件に対しては、学生大会で非常にたくさんの学生が結集して、共産党に対する、非難・批判は轟々と巻き起こったんですけども、残念ながら、学友会の主流派の結集力というのはまだまだ足りなく、逆に共産党のそういうリンチ事件に対する危機感というのが非常に大きくて、その翌年の自治会選挙で文学部が共産党に敗北するというような状況でございました。

その64年に、私が同志社学友会の委員長になったわけですけども、私2年生でございまして、私、生まれが九州のど田舎で高校時代はソフトボールばかりやっておった人間で、大学に入ってポポロ座事件の最高裁判決で初めて政治に目覚めて、デモというのに参加してというような状況ですので、それこそ、マルクスもレーニンもほとんど知らないような状況で、同志社学友会の委員長になってしまったというような事でございます。で、その中で、文学部の権力を奪取し、もう一度、同志社のブントを盛り上げなくてはいけないという立場にあった

わけですけど、そこで、出会ったのが、田原芳、私は田原芳ではなくて、やっぱり鎮夫さんなんですね。ずっと、そういう意味では私の学生時代の指導者というのは、鎮夫さんだったという風に思っております。

とにかく、同志社学友会はある意味では非常に民主的な、資料に書いてあるので説明しませんが、非常に民主的な組織で中央委員会というのが全学の最高、もちろん学生大会はありますが、通常は中央委員会というのは、一番決議機関として日常的に行われている機関でございますけれども、そこへですね、文学部の共産党のメンバーが代表として中央委員会に入ってくるわけですよ。で、論争を挑まれるわけですけども、私はとにかくマルクスもレーニンもあんまり知らんのが委員長なわけで、何でこんなのを委員長にしたのかと、関西ブントをちょっと恨みには思いましたけれども、ただ、飛車と角に前田良典と堂山道生、私2年生ですけども、堂山さんと前田さんは3年生でございまして、この二人が共産党のそういう論争を私に代わって論争をやってくれました。やっとなあ、私が何とか共産党に対抗できるようになったのは、年が明けた頃でしょうか、非常に前田さんと、堂山さんには、そういう意味では本当にお世話になったという風に思っております。

で、中島さんに教わった事は、さっき正治さんがおっしゃいましたけれども、その確かに政治については、大胆明快な議論を言われますけれども、ところが、大衆の指導については、非常に繊細な事を要求されますし、それをどうやって実現していくかという事が、同志社学友会の運動をまた再生させる道であったという風に思っています。たまたま、そういう意味では幸運であったと思えますけれども、1年生の時に、学費闘争がありそれは63年ですね。65年に学生会館の本館闘争というのがありまして、管理運営権を学校側と争うという闘争がございまして、全国でそういう意味では、先駆的に勝利を勝ち取ったというところですよ。え、その中で非常に画期的な事は、学友会、主流派というのは学術団を中心とするメンバーが、自治会をある意味では牛耳っておったわけだけ

ども、文化団体連盟というのがありまして、これは同志社の中で一番組織数の多い、会員数の多いサークルですけども、このサークルというのは言ったら、無関心層といえますか、ノンポリの集団だったんですけども、それが中島さんの指導を形で実現する事によってその文化団体連盟が主流派のある意味では、支持のアジテーターとして登場するという形で、そういう意味では非常に狭い支持層からその文化団体連盟が主流派の支持母体になったという事で、非常に広いそして厚い同志社学友会の運動というのができてきました。

一方で政治闘争というのが原子力潜水艦、それからベトナム、日韓という形で同時に行っておりまして、それでも政治闘争と学園闘争が、本当に一体化していたかはどうかは分かりませんが、そういう意味では一体化するという形で果敢に戦っていったと、じゃその戦いの結果が65年ですので、あと明治大学と中央大学にこれも飛び火というわけではありませんけれども、連続して中央大学と明治大学にいて、そういう意味で全学連の再建それからブントの統一という事に対する、実態的な運動の支えを作ったという事ではないかと思えます。確か、あのブントの学生対策部というのは63年、64年というのはございまして、そういう意味では個人的な中島さんの指導という形で運動というのが構成されたという事ですので、そういう意味で全学連の再建とブントの統一というのは、ほぼ同時的になされたわけですけども、その実際のバックを作ったのは、やはり中島さんの手作りの運動がなかったら、ブントの統一も三派全学連の結成もなかったのではないかという風に今でも思っております。

ただ、残念ながら全学連再建で私は東京に参りまして、そういう意味では同志社のあらゆる組織を制覇して非常に厚い戦いを組織を作ったわけですけども、その中心メンバーの63年度生、大量な活動家を作ったわけですけども、その大量の活動家に対して、ブントの統一と全学連の再建以降、ブントのそれ以降の展望、ブントのそれ以降の継続的な発展という事に対して63年度生に提起できなくてほとんど

のメンバーが、卒業という事で戦線を離れて
いって結果として私もその後ではございますけ
れども、戦線を離れていったという事でした。
ある意味では非常に新しい戦いを作っていく
にあたって、同志社から思想家を全国に指導
していける人間を作っていく絶好のチャンス
ではなかったと思えますけれども、そういう
意味で私自身の問題として同志社の学内にそ

れを投げかけられなかったというのが非常に
残念でありますけれども、ただ、先程も申し
ましたように、少なくとも三派全学連と、ブ
ントの統一という事については、その同志社
学友会の運動が大きな力であり、それを作っ
たのは中島さんだという事だけは改めて思
い起こして頂きたいというふうに思います。
以上です。

会場スピーチ・文書

(敬称略)



○天野 博

67年立命大入学

◎現在「不動産コンサルタント」

立命館大学の天野でございます。今日は、我々の全共闘議長佐野二三雄さんと裏議長であります千田智之、法闘委の早川義輝、それから現役の活動を続けている学生も駆けつけております。同志社といえば懐かしく思います。さきほど紹介がありましたように、私どもの議長は同志社の出身であります。そして中島さんと一緒に活躍された高野澄さんは当時、日本史の助手をしておりまして、彼はもちろん全共闘に参加したのですが、その日本史学科は「全日本史闘争委員会」と名乗っておりました。全日本史闘争委員会には、教員、院生、学生が集まって、全共闘運動のなかでもほかにはない特異な存在で、奈良本辰也、林屋辰三郎など教授陣が辞任するなど、最も先鋭な戦いを組織したことで知られています。

田原さんの遺稿集のご案内がありまして、すぐに参加の返事をださせて頂きました。実は、去年の3月に友人の松森孝雄の遺稿集『水平線の向こうに』(風塵社)を出しましたところ、彼が遺稿の中で田原さんの論文を親しく紹介し、また彼の孤立を憂う文章を書いております。そういうわけで、ぜひ参加させていただきたいと思ったのです。松森孝雄は1972年のリッダ闘争の仲間で、2002年、1972

年から30年目に日比谷公園で抗議の焼身自殺をとげました。彼が超人的な記憶をよみがえらせて書いた「リッダ闘争の覚書」には、奥平はじめ戦士たちのありのままの姿が描かれています。遺稿集は3年かかって仕上げました。時間がかったのは、彼の幼いときから死ぬまでのジグザクの人生をそのまま正確にトレースしようとしたからです。皆さんにも、読んで頂きたい。2年前、早川(赤軍派)の最後の上司、山田孝(京大)さんの追悼集会にも参加させて頂きましたが、その時にですね、参加者が「テルアビブ空港乱射事件」という言葉を使っておりました。活動家の間でさえ、そういうイメージでリッダ闘争が捉えられているのですね。せめて、我々の仲間ではそういう表現はやめていただきたいとお願ひしたい。リッダ闘争の真実がこの本に詳しくでております。

立命館のことですが、私どものかつての仲間でも、「天野さん、日本共産党このごろ進んできたやないか、ええやないか、ほかにはないし支持してもいい」「立命館は改革され、大評判」という人たちがいるんですが、全くそうではありません。立命館では、全共闘敗北以降、学生管理が強化され、学生運動もサークルも全て登録制で規制して、登録が受け付けられないと教室も使えないし、ピラもまけない、新入生の勧誘もできない状況です。しか

し、民青は公認。これがプロ独か、スターリン主義かどうか知りませんが、立命館と日本共産党は言葉でどのようにいいことを言ったとしても、現実に権力を握ってしまうと、こういうことを平気でしているのです。日本共産党にやられたことを、仲間にするというよう

な悪循環が新左翼内部にあります。こういうことは早く終えたいものです。二つほどお願いかたがた、近況をご報告しました。皆様のお話を聞き、「われわれに課題はなお、残っている」という思いを強くした次第です。

いま、何故、関西ブント／政治過程論(田原論文)か

蔵田計成



○蔵田計成

57年早稲田大入学

59年東京都学連・副委員長

68年マスコミ反戦連合委員会・議長

◎『安保全学連』『新左翼運動全史』『新左翼二十年史』他。

◎現在「著述業」

しゃべらせて欲しいと申し出たことはないん

ですが、関西ブントに対しては、歴史的評価や政治的問題点に関して、かねてから一言申し立てたいという思いがあったことは確かです。あの山田孝君の関西追悼集会に出席したかったんですが、腰痛で出席できなかったの、この場をかりて、提起したいという思いはありました。ところが、生憎5分ということなので弱っています。たりない分は、2次会に譲るとして、ともかく、問題提起をします。

関西ブントのルーツを探るべく、田原芳君が書いた69年5月3日付のパンフレットを我が家の本棚から取りだして読んでみたんです。そうしたところがですね、関西ブントが生まれたナゾと秘密が、はじめの40ページ目に書かれた数行から読みとることができるんです。それは、60年安保=6・15闘争における最終局面を、彼なりの言葉によって総括の結語として論じている個所です。田原君の先輩である当時の関西ブントは、運動論的な問題に関して、「大戦術」「小戦術」として、戦術的側面からのアプローチを試み、それを「政治過程論」として戦略措置したわけですが、後に、それを引き継いだ田原君の論文が、

関西ブント結成の原基形態を明らかにしているといえます。で、それは文字通り「第3期論」から、第2次ブント結成を経て、赤軍派結成、前段階武装蜂起路線、連合赤軍の「銃による殲滅戦路線」にまで、延々と引き継がれていったわけです。しかも、この関西ブントから第二次ブントへ向かう流れとしてたどった運動過程は、明らかに新左翼崩壊へ向かう始端と終端というか、ブントの末路を政治的に体現していると思うんですよ。

その末路へ至る過程を人格的に体現していったのが塩見孝也君だと思っています。もちろん私は個人の問題として申し上げているわけではなく、一つの物化された歴史的産物であり、一つの政治党派が生み出した政治的結果として語っているわけですので、左様ご了解下さい。いずれにしても、第二次ブント再建過程でイニシャティブをとったのは関西ブントの「政治過程論」であり、結果的ながら、軍事最左派の赤軍派を登場させ、第二次ブント崩壊へ至る政治路線上の源流になったと言うのが、私の提起したい「関西ブント論」なわけです。

では、何故「関西ブントなのか」ということですが、それはですね、第1次ブントの分派闘争が、首都圏学生細胞内における戦術論争に限定されて始まったということと、ブント=全

学連が闘った60年安保「4大闘争」の実態が明確に総括されないままに崩壊したために、その不十分さから派生したマイナスの余波をもるに受け、関西から遠望した首都圏の闘争の実態をそのまま、あるときはデフォルメし、伝説化し、歴史化して総括してしまった、ということなんですよ。

結論部分しか提起できませんが、ともかく、安中派世代というか、安保闘争の全過程を、学連書記局員として闘い抜いた一人として、あらためて提起したいことは、そういうことなんですよ。このような政治的、歴史的意味の大きさを含めて、第1次ブントから第2次ブントに至る問題点や、第2次ブント自体の問題点は、さまざまあります。そのように考えるとき、私は最後の結論に飛んでしまうんですが、新左翼崩壊の「墓掘り」ともいうべき「三つの系」を、この場で初めてながら大胆な仮説として提起したいと思うんです。それは、第一は、連合赤軍であり、第二は、内ゲバの黒田哲学であり、第三は、岩田帝国主義論を含めた、さまざまな未完の現代帝国主義論であったということです。なお、第3の問題について若干補足させて下さい。かつて、革通派は「池田内閣打倒全国ゼネスト」の破産で、劇的に互

解しました。その際、服部信司君と私は「第二帝国主義論ができるまで、活動から身を引く」と言い残して自己解体したのですが、その後、服部君は復活を遂げてマル戦派を立ち上げて、関西ブントの総括に対置しました。しかし、マル戦が依拠した岩田帝国主義論も結果的にはレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」というテーゼに代わる、「第二のレーニン・テーゼ」にはなり得ませんでした。その意味で、岩田帝国主義論を含めた「未完の現代帝国主義論」を未完であるが故に「第三の系」に加えたわけです。

いずれにせよ、戦後の解放軍規定から始まった日本の反体制運動は、共産党や新左翼を含めて、アメリカ帝国主義を頂点にした世界帝国主義の反共反革命世界戦略と、その下における日帝の「高成長・軽武装路線」対して、「的はずれな空砲」をうちつけて総敗退の途を余儀なくされたという結果に対して、深刻で、痛苦的な総括をすることによって、反グローバリズムとの生死を賭けた全面対決の基軸を再構築していくべきではないかと、考えます。以上の提起をもって、私の挨拶とさせていただきます。

田原芳論文にみる「第1次ブント総括」に関する問題点

蔵田計成

問題点1、田原論文が、第1次ブント総括の対象論文としたのは「ブント第三次綱領草案」であった。ところが、この綱領草案は60年4月のブント第4回臨時大会において「歴史的使命は終わった」ものとして廃棄され、新しい綱領の作成が提起された、という事情がある。その意味で、この綱領草案が第1次ブントを体現していたとするには、限界と問題があることを指摘したい。この点に関して、たとえ田原論文が次のような注記を付したとしても、つまり「それが『廃案』されたとしても、これ以上のものが提出されないかぎり、『第3次綱領草案』を、我々の『綱領的立場』を検討するよりしかたないと思う(ママ)」(田原

論文)という限定的注釈を加えていたとしても、綱領草案自体がもつ自明な限界性を越えることはできない。しかも、第3次綱領草案の歴史的役割の意味内容、廃棄の理由などが明確にされないかぎり、たんに、検討の手がかりという程度に過ぎないし、総括内容の評価とは別に、大幅な制約を受けざるを得ない。問題点2、そのような限界と問題点は、別な表現形態をとって総括内容の不十分さを露呈している、といえるかも知れない。田原論文は「安保闘争の終末において、『内閣打倒』→「国会解散」→『総選挙』のコースに結集する小ブルの市民運動、国民運動を打ち破り、プロレタリアートのエネルギーをより高い政治に導くこ

とはできなかった…。この重い壁の前で安保闘争は終わり、又同盟も立ち止まり、立ち止まることによって崩壊したのである。何故なら、同盟は、帝国主義打倒の闘争が、このような局面にさしかかった時、それをどう導くべきか知らなかったからであり、又、その準備を欠いていたからである(60年安保闘争総括)と結論づけるとき、その総括がたどり着いた帰結点は、結論の前提となるべき論理的根拠を棚上げにして、主観的願望をもって、結論に置き換えているに過ぎない。この総括は、「武装蜂起の思想の常識化」というプロ通派が解体直前に残した総括に酷似しており、これと同一次元の総括といえる。だが、問題の本質はその先にあった。「では、如何にして切りひらくべきであったか」、より厳密には、「果たして、知っていたとして、それが可能であったのか否か」「何故、局面を高い次元へと切り開くことができなかったのか」という設問に対して、回答を与えるべきであった。さらに、その設問と回答を追求していけば、その延長線上には、以下のような問題点が伏在していた事実に出くわしたはずである。

問題点3、第1次ブント=安保全学連の基本的戦略路線は「反帝実力闘争」であり、その極限的指向によって実現した闘争が、「60年安保4大闘争」であった。では、その個々の闘争はどのような実態、問題点、偶然性などを内在させて展開されたのか。それらの諸事実の背後にこそ、第3の問題点を浮かび上がらせるキーワードがある。

11・27国会構内抗議集会(3人の野次馬労働者が国会構内に侵入、国会正門のカンヌキを内側からはずし、「全員の請願」に実現に貢献したという偶然性)

1・16羽田闘争(敵の裏をかいたという、戦術的成功と勝利!)

4・26チャペル前バリケード突破闘争(闘争は不発→ブント政治局解体。以後、5月闘争は学連書記局が指導、「強行採決→批准→敗北→闘争終息」という戦略方針を立てていた。蔵田についていえば、強行採決された日から、出身大学自治会に帰って足場固めの体制に入った。5・26国民会議第16次統一行動17万

人国会デモの総指揮に際しても、敗戦処理と反主流派全学連との党派闘争を最優先課題に設定、現場では戦闘的デモ形態を控えて自重。6・1官邸突入闘争は不発。6・4ゼネストに最後の期待と展望を抱いて、国鉄構内座り込み支援体制をとったにすぎない。組織体制に関しては、政治局は解体、学連書記局の現場指揮者は逮捕者続出で払底し、5月末には、学連書記局体制も壊滅状態に陥った。恩田、富永、北小路等の人的補給をしたが、書記局機能は維持・回復できなかった。)

6・15国会突入闘争(全学連主流派とのせめぎ合いのなかで戦取された闘争という偶然的側面。つまり、6・10ハガティ闘争の爆発が唯一・最大の引き金になった。前夜の都学細代で突入方針を満場一致で確認したが、戦術の任務分担をしたわけではない。突入方針を最終的に決定したのは現場宣伝カーの車中であり、学連書記局現地指導部は2対1(賛成・加藤昇、西部邁、反対・北小路敏)で突入を確認・決定。闘争が戦略的展望を欠いた非計画的側面をもっていった事実は否めない。突入闘争を保証したのは唯一各大学細胞であった。大学細胞指導部や同盟員の闘争感覚は健在で、大衆の自然発生性を肌で受け止め、敗北感も薄かったのかも知れない。)

問題点4、もちろん、これらの4大闘争を可能にしたのは、安保ブント=全学連の存在自体と、その優れて戦闘的な戦略路線=反帝実力闘争路線にあることは、いうまでもない。この事実を抜きにしては、4大闘争はあり得なかった。このことを前提にして、問題点を付加すれば、3つある。

これらの闘争の厳密な個別的検討や総括がなされないままに、デフォルメされ、歴史・伝説化され、総括は定式化=定説化されたこと。その定式化は、そのまま第2次ブント=新左翼の政治路線として引き継がれ、赤軍派、蜂起戦争三派、連合赤軍へと、継起していったという事実。中核派との違いもこの点にある(後述)。田原論文にみる限り、関西ブントの戦略綱領=「政治過程論」の原点は、第1次ブント=全学連の「反帝実力闘争」路線の核心部をなす、ブント主義=新左翼主義(革命求心主義)であ

る。このブント主義的革命論こそ、正負両側面において掘り下げていくべきであった。とくに、その否定的限界性を止揚すべく総括することが必要であった。その獲得すべき内実とは、運動組織論の視点からの全面総括、つまり、実力闘争の政治的、物理的、運動論的限界性、運動の社会的波及性・可能性・諸条件等に関する全般的総括でなければいけなかった。

問題点5、補足すれば、第1次ブント～第2次ブントへ至る実践的経験の歴史的継承性の断絶にある。70年安保・沖縄・全共闘運動においては、この4大闘争を歴史的・経験的・実践的に総括しうる立場にあった中核派と、その立場になかったブントとの政治的落差は大きい。カードルの「有無」、政治的経験の「有無」が、新左翼諸党派にとって命運を分けた。例えば、60年安保6・15闘争の事実関係に関して、総括に必要な資料が十分開示されることはなく、第1次ブント内の論争は十分に深化・解明されないままに崩壊し、6・15闘争に関する厳密な総括へのアプローチを保証する理論上の与件を欠いてしまった。その結果、第2次ブントは、あの60年安保闘争の4月段階～6月段階を経て、最後の激突昂揚局面に至るまでの、ブント政治局や学連書記局内部において知りうる、闘争主体の側の正確な実態把握に関して歴史的教訓を汲みとるうえで、大きな政治的ハンディを余儀なくされた。そのハンディは、前段階武装蜂起路線、銃による殲滅戦路線にまで登りつめたブントと、大衆暴動路線で自己制動させた中核派との、戦略上の実践的落差として表面化した。

第1次ブント内分派闘争の始端と経過

1、7月29日～30日、ブント5回大会が開催され、政治局解体がはじめて全同盟員に明らかにされた。解体にとどめを刺すかのように、東大細胞は意見書（国会再突入ができなかった、その日和見主義の理論的根拠＝姫岡自己金融論批判）を提出し、大会準備委員を選出。

2、8月5日、全国学細代開催、政治局員追放を決議。賛成50票前後、反対5票（佐藤桑吉が反対演説、蔵田計成、鈴木迪夫他2名）。臨時政治局を学生で構成、分派闘争に突入。

3、8月11日、「反東大連台フラク」＝労対・労働者グループ初会合。学生運動内部で始まった、不透明で閉ざされた学生細胞内の対立抗争に危機を感じて分派結成に立ち上った。だが「全学連中心主義からの脱却」では一致したが、総括は提起できなかつた。10月になって労対グループと南部地区労働者細胞グループに分裂し、労対・センキ編集局等の職革・労働者グループは「戦旗派」を結成した。

4、8月14日、東大意見書全国配布、清水丈夫推薦文同封。

5、8月下旬、当時都学連副委員長・学連書記局員であった蔵田は、ブント5回大会直後に、下山保と謀って、出身校の早大細胞総会でLC（指導部）を追放し、東大派への支持を多数で決議して東大＝早大連合「革命の通達派」（創刊号9月18日）を結成し、直ちに多数派工作を開始した。東大本郷が東大教養細胞を、蔵田が学連書記局オルグ担当先であった明大細胞、女子美細胞オルグして、支持を取り付けた。これらの5大学自治会は、全学連加盟自治会であり、首都圏学生運動の動員主力部隊であった。

6、三番目に登場したのが「プロ通派」である。姫岡怜治は、清水丈夫を東大派から引き離し「東大理論から訣別し、労対の日和見主義とも訣別」して9月14日、「プロレタリア通信」を創刊した。プロ通派の主力は学連書記局員であった。当時の学連書記局員は2名（蔵田・早大、神保・教育大）を除いて全員が東大本郷・駒場出身者であり、蔵田以外は全員が反東大フラクへ参加した。その理由は、東大細胞は早くから独自の研究会を組織するなど、学連指導に対しては独自色を強めていた。学連書記局担当（姫岡）も東大本郷に対して、オルグに入りづらいう状態にあり、学連書記局内も反東大意識が強かったからである。その他プロ通派に参加した細胞は、中大、法大、お茶大、外大だが、自治会執行部のない中小規模細胞で、動員数も少なかった。

7、このように、ブント内分派闘争まず学生細胞内の分派闘争として始まったが、その初発の段階において強行されたクーデター劇にも等しい分派結成の手法が、ブント党派闘争の基本的性格や、その後の方向性を逆規定する直接的

な要因となった。すなわち、先の早大細胞における「東大支持決議」はたんなる電撃作戦であった。というのは、その個人的動機たるや、①早大細胞の活動の停滞や、LC指導部の人事上の処遇を不満とした「私的怨念」が先行し、さらに、②都学連副委員長として学連書記局で活動していたとき、その日のアジネタを新聞記事から拾い集めて、大学オルグに出かけるような学連指導のナンセンスさからの、新しい飛躍と再建への期待を、わずかながら東大細胞意見書に求めようとした、という「三分の理」にすぎなかつた。ところが、この電撃作戦は邪悪な思惑をはるかに越えてしまった。そこには論理的必然性や、分派闘争のセオリー上のプロセスや手続きは、何ら介在させないままに、東大細胞を左翼少数反対派に留め置かないで、逆に、多数派分派という主役に仕立て上げてしまい、波紋を広げた。そして、論争を東大細胞意見書が提起した国家独占資本論争と、6・18再突入をめぐる戦術論争のレベルに矮小化させ、成算のない低水準な総括に押しとどめてしまった。その結果、全同盟内の綱領論争へと深化・発展させるための回路を、事前に切断してしまつたが、それだけではない。この多数派分派としての革通派の唐突な登場は、政治的、組織的、理論的に混迷や困惑を持ち込み、ブント内の左派グループの結集を妨げる結果になり、結局は、革共同黒田派（マル学同）への屈服という最悪の事態へと継起した。その余波は、その後の長きにわたるブントと革共同の党派再編（ブント再建や、革共同三次分裂）へと続いたのであった。

8、10月8日～9日、都学連13回大会を開催したが、初日は都自連は入場できず、二日目は、代議員圧倒的多数派＝革通派が委員長（蔵田）、執行委員会は1票差で多数派＝プロ通派が書記長（で、田中学）で妥協が成立したかに思えたが、突如プロ通派が一方向的に破棄、衝突・流会となった。

9、10月11日戦旗派結成、分派闘争は三つ巴の攻防戦へ。全学連（全国ブント学生細胞）は、都学連と京都府学連以外は、すべて戦旗派に結集した。道学連をはじめとして、北陸、東

海、奈良、中国、九州等であった。このようなブントの党派闘争にみる際立った地域性は、論争の未分化・不完全性を物語っているといえよう。

結末

革通派：池田打倒→政策阻止→政治危機という論理に行きつき、池田内閣打倒ゼネスト不発によって、実践的にも理論的に破産。61年1月には解体状態におちいり、あとは「反マル学同」の1点で結集した社会学活動家がブントの遺産を継承。

プロ通派：解散決議は3月、1部は「共産主義の旗派」を結成。1部は、革命運動に残るには「二度とあんな思いはしたくない」「死ぬ思い」で革共同全国委に合流する他には途はないと判断した。この合流＝屈服は、戦旗派の労働者グループとは違って、プロ通派学生グループにとっては、政治的投降に等しかった。当時の首都圏学生同盟員のだれもが、安保闘争の全期間を通じて極左日和見主義・小ブル急進主義批判の集中砲火を浴びる中で、最後の最後まで戦闘的に自己貫徹した。そのような自負心が、革共同（関西派）や革共同全国委（マル学同）への激しい反発を抱いていたからである。東京社会学同グループが、全員反マル学同の立場から独自活動を買ったのもそのためであった。

戦旗派：3月、全国委と革命的戦旗派との「統一アピール」で合流した。

その他：1月「博多交流会議」が、長船社研と大正行動隊共催のもと「新しい前衛党の創成をめざす全国労働者の交流会議」として開催。2月には「共産同全国労働者細胞代表者会議」が京都で開催、約70名（学生半数）が参加、戦旗派は立場表明が認められただけで退席、連絡会議の代表を決めて、3月を目途にブント第6回大会を申し合わせたが、総括内容に一致を見出すことができず、「反戦旗派、反革共同全国委」のまま、ブント再建は立ち消えになった。

『プロレタリア独裁への道<I>日本の孤立観と生産力思想』 (66年)刊行のころ

2005年12月15日・小林 一夫(同志社大学)

○小林一夫

63年同志社大入学

63年同大学生新聞局加入

66年同大学生新聞局出版部「プロレタリア独裁への道<I>」発行

『プロ独への道<I>』復刻の記念の集いに、ご案内を頂きありがとうございました。

当日出席できない可能性が高いので、この論文集の40年前の編集責任者として、一言当時の背景を振り返らせて頂きます。

この論文集(注①)は、当初の印刷代は全額同志社学生新聞局の局費で充当され、原稿の最終責任が同志社学生新聞局と社学同同志社支部常任委員会にあるという、極めて強引な形で刊行されたものです。

『第三の転換点』と我々の課題』から『第三期学生運論』へと至る過程で、関西ブントの方向が政治のダイナミズムというか、政治力学というか、それへ流れすぎるという批判に対して、中島さんがきちんとした戦前、戦後の共産主義運動の総括の中で、思想的反論をしておきたいというのが、出版の目的であったと記憶しています。

当初の予定では、『日本の「孤立観」と「生産力思想』の章でもって全てを言い尽くして、終章にしようという考えではあったのですが、(ここままで終わってれば、同志社学生新聞局の局費を投入しても、余りにも党派的という批判はぎりぎり返せる)60年安保以降の関西ブントのたどってきた論集をあわせないと、前半が生きてこないということで、260頁にも及ぶ、大論文集になったものです。

表紙のシモーヌヴェイユの言葉や(注②)、あとがきでのニーチェの言葉(注③)からの引用は、思想家としての中島さんらしい文言ですが、『プロレタリア独裁への道』という題名にも、当初は否定的で、今では忘れてしまいましたが『遠くより来たりて遠くへ消え去るもの』というジャンルに近い題名を、中島さんは想定しておりました。

2ヶ月間、ある時は新聞局のBOXで、ある時は中島さんの自宅で、一章一章の章立ての意味と現状の分析を議論しながら、議論は酒で終わりつつ刊行にこぎつけることが出来ました。私自身は、この刊行で新聞局を完全に離れ、社学同の活動に集中することになり、きちんとした形で、『プロレタリア独裁への道<II>』を刊行できなかった事が名残りでもあります。(中島さんが、<II>のテーマである日本インテリゲンチヤ運動の総括を一部分文章化していたことは、何年かたって東京のピアホールでジョッキを共にした際、お聞きしました)今回の復刻、大変なご苦労があったと思いますが、関係された皆様に、宜しくお伝えください。

なお、この論文集の小見出し付け、印刷所での校正等は私と共に、この時期から4年後に散った望月上史が共に当たってくれた事を思い出として申し添えます。

彼もこの時期までは新聞局員で、この後同志社の学友会から府学連の中核へと歩いていくこととなります。故中島鎮夫さんと望月上史君に合掌です。

注①

『プロレタリア独裁への道<I>日本の孤立感と生産力思想』

共産主義者同盟関西地方委員会 田原 芳
編集 京都市上京区烏丸今出川同志社学生会館
同志社学生新聞局出版部 小林 一夫

1966年7月30日(非売品)

注②

『なるほど人はいつでも社会主義は明後日くる

だろうと信じ、この信仰を義務、あるいは徳とすることである。人が毎日、明後日とは今日の翌々日だと思っているかぎり、けっして裏切られることはないだろう。けれどもこういう精神状態は例えば最後の審判を信ずる善男善女の精神状態と区別がつけにくい。われわれは、もしこのくらい時代を雄々しく切り抜きたいと思うならば、ソフォクレスのアリアスのような空なる望みでいい気になっていられない』(シモーヌ・ヴェーユ)

ヌ・ヴェーユ)

注③

『怪物と戦うところの人は、彼がその為に怪物にならないように用心するがよい。そして汝が久しく深潭を見入っている時、深潭もまた汝を見入るのである』(ニーチェ)

「70年」の記憶と奏想

2006年1月8日 前田良典

○前田良典

62年同志社大入学

(1)

60年安保闘争を知らない61・62世代の我々は65・66年と日韓・ベトナム闘争を闘いながら全学連再建に取り組んでいた。65・66年当時の関西の我々には学生大衆運動の実績(蓄積)があり、東京での闘いや組織戦にも勢いがあった。いわば「勝ち組」で「肩で風を切る」勢いであった。しかし、東京に行く私にはいつも付きまとう思いがあった。東京のメンメンの言葉を「みずみずしさが無い」「枯れている」「響かない」「砂を噛む思い」「博打」という感覚で受け止めていて、何でやろうという思いがあった。当時は、「全国政治はシベリアなものだ。関西は甘い。」くらいに思っていたが、後で「いや、あれは学生大衆運動の蓄積の違いが原因だ。」と思うようになった。蓄積の違いは一つ一つの街頭政治闘争の積み重ねであるが、それにも増して学内闘争の蓄積の違いが大きなファクターだと今になって思う。加えて、関西はセクトと言っても代々木とフロントくらいのとせめぎ合いで余計なエネルギーを割くことも少なかったが、東京は60年以降セクトのせめぎ合いが先行し、学生大衆運動はその後の如き状況の違いも大きい。後の日大・東大全共闘の爆発に対して不十分であるが第二次ブントがコミットできたのは、こうした関西と明治・中大での学内闘争の蓄積がある。

65・66年当時の学生戦線の中での我々

内部の組織展開・舞台の回し役は新開純也、田中正治さん等であり我々の世代はパシリ役であった。三派全学連が結成されて世代交代となり、67年以後の大舞台の学生戦線の回し役が塩見孝也を中心のした61・62年組になった。私個人は学生戦線を離れた。

67年10・8羽田闘争から68年1月佐世保エンブラ闘争、日大・東大全共闘への激動、68年後半から69年にかけての所謂「壮大なゼロ」の闘いから赤軍への結成への流れは、第二次ブントが内包していた問題を抜きにすれば(単に学生運動としてみれば)よくわかる。分派・分裂の原因は既にブント内部にあった。私は分派・分裂が納得できないし東京で何が起きているのか全くわからずであったが、今になって関西同世代の顛末が随分解ってきた。

私は以前にも少し言及したが「壮大なゼロ」からその局面の打開(過渡期世界論と7・6事件、そして7・25事件後の望月の死)がもたらした結果は、我々の器量を超えたものであり、自らがもたした結果(状況)そのものを主体的に切り開こうとして転倒が起きたことがよく解る。それまでの「組織された暴力」が「軍」になり、「プロレタリア国際主義」が「国際根拠地」へと変化した。打開した状況=開かれた地平の反作用によって全体を統合していた方針が本来と全く異なる対症療法の方針へと連続的にすり替わっていった。この苦汁の転倒とスリ

替えの結果が示唆するのは、「過渡期世界論」が基本的に「政治過程論」を狭い思想的キャパで焼き直したということであり、両者に共通する政治力学的戦術体系を凌駕する思想・戦略体系としての「党と階級形成」論と局面の階級的力関係の把握をブント7回大会・8回大会が獲得できなかったということである。我々のどこから大衆運動と連動しないウルトラ戦術が出てくるのか、あるいはピョンヤン行きが出てくるのか、当時の私にはさっぱりわからなかった。我々は自分たちの闘いの結果を通じて毛沢東路線を機械的「唯物弁証法」と見ていたし、ピョンヤンの民族社会主義・唯軍主義をミニ毛沢東と見て、それが我々の世代の共通認識であると思っていたからだ。

私は、「毛沢東＝機械的唯物弁証法」と言ったが、このように方法の問題・哲学の問題として言ってみても、何も生産しないと此の頃は思う。第4インターや革マルばりの反スタ思弁論による現実的アプローチは何も生まれてこなかった。私はスターリン・毛沢東・金日成の思想の問題ではなく、一国社会主義の国家ガバナンスの問題として立てるべきであると思う。つまり世界革命から切り離された一国社会主義は革命派が権力を掌握すると同時にプロレタリアートの階級的利益と民族国家的利益の矛盾・分裂を開始するということである。ネップの失敗とトロツキーの追放、新5ヵ年計画の失敗と朱徳の追放がその始まりであり、ソホーズ・コルホーズと農民の虐殺と大粛清そして大躍進の失敗と彭徳懐の追放、ノーメンクラトゥーラ・党員官僚の支配階級化、果ては大口をたたいてブルジョアジーと裏取引する北京・平城の今日の姿となる。ベルリンの壁崩壊以降、ソ連の援助を失った平城は農業を崩壊（国民の飢餓）させながら膨大な国家予算を軍事費に投入し虚勢を張りながら米帝と裏取引である。

一方でハバナは「ホセ・マルティ（1982年キューバ革命党）から続く民主主義革命」を唱えて、有機農業で農業を再建し医療・教育を進化させながらAALA諸国への援助をしている。この2つの際立つ国家ガバナンスの違いは民族国家（支配階級）の利益のために世界プロレタリアートの利益を裏切る者と片や頭を低く

して世界プロレタリアートの利益と共にあるとする者の違いである。これは双方が見ているスパン（目線）の違いであり、キャパシティーの違いでもある。ともあれ国家を掌握したプロレタリアート（一国社会主義）は自らの抱えた矛盾分裂から、「ネップ」にしる「新5ヵ年計画」にしる、国家資本主義政策を採らざるを得ないわけで、不可避に自らを後衛の位置に置かざるを得ない。

既に一国社会主義の方針を決定していたにも拘らず、1919年革命ロシアとポーランドの国境戦争の終結講和を前にしてレーニンがモスクワ党員達に「我々が西ヨーロッパのプロレタリア革命によって支持されないなら、この勝利は安定したものとは成りえない。我々は幾つかの主要な資本主義国でプロレタリア革命の勝利を獲得しなければならない。」と、ロシア革命とヨーロッパ革命の一体性を重ねて訴えている。事態は列強の反革命的介入に対する、大ロシア民族主義的結集と食糧増産・社会的安定とそのシステム化（ツァー官僚の復活）の流れを加速させ、その指導者の資質や思想性の問題ではなくなっているということであり、世界プロレタリアートの利益と対立せざるを得ない不可避の道を選択したということである。かくして革命は残された国々の人民自らの手に委ねられるということである。ではコミンテルンは一体何だったのか？指導部のスタンスによる差異はあるが、基本的にそれは語るまでも無いということである。

よど号でピョンヤンに飛んだ若林君が、30年の月日を経て帰日しようとしている。当時の路線と方針については真面目に総括されなければならない。どうして、戦略的展開を持たない落とし穴（朝鮮労働党）に飛び込んだのかである。

しかしそれとは別に、若林君の大学時代のサークルは文化団体連合の広告研究会であり、観光事業研究会であった。彼が自治会活動から出て来たのではなく文化サークルから出て来たことに加えて、彼が単独で行おうしたのではなくあと2名が続こうしていた上に、この3人をサークルの30～40人が支え上げていた（サークルの機能）ということである。62・63世代

の後で同志社学生戦線をまとめていた堀清明・K・Yにしる、奈良平靖彦・T・中大で死んでしまった望月上史そして矢谷暢一郎にしる、この事実は驚く他はないだろうと思う。私も同じである。

69年安田講堂陥落後の同志社で開催された反帝全学連大会では、「ポツダム自治会の時代は終わった。全学連のコミュン型再編を」と言ったが、足元の同志社ではバリストに入りながらも実態はポツダム型の自治会運動が現場で機能していたことになる。60年代、同志社学生運動にさまざまな闘争が展開されたが、あの騒然とした69～70年の段階でもこのありさまであるから、セクトの激しい草刈場となった東京とは異なるスタンスを同志社学生運動がずっと持っていたことになる。これは政治の中心である東京を離れた京都という条件も大きい。あの時叫ばれた「コンミュン型再編」なるものが何だったのかを改めて問いかけている。それ自体が、幾重にも重なる位相の戦線総体を牽引できる路線であったかどうか、改めて検証されなければならない。問われていたのは総合的スタンスと方向性（ヘゲモニー）であり、組織問題では無かった。それはやはり、総体として視野狭窄型の路線だったのではなかったかということである。

「政治力学と戦術」というブント関西の60年総括理論である「政治過程論」は、61年以降の関西のメンメン（とりわけ、60年安保後の我々61・62年組）のDNAに沁み込んでいるようだ。それは第三期論にしる、過渡期世界論にしる、装いを変えた政治過程論であり、神田カルチェ・赤軍派の誕生・中電マッセストもそうであるように思う。60年を知らない61・62年組の我々は、60年安保闘争を戦った先輩たちに敬意を抱いたが、彼らの言葉の意味を慎重に配慮し噛み砕き理解することを怠った。ブント中央（PB＝政治局）のメンバーの発言を「また、ふろしき広げとるは」としてろくに聞きもしなかった。PBのメンバーも、例の組織スタイル（ヘーゲル弁証法？）でそれを許した。61・62年組には、実際の府学連・三府県統一行動は自分達がやっているという思いであり、関西の波が東京へ行き、66

年全学連再建も我々がやったという考えであった。此の組織問題は、後の7・6事件と赤軍派分裂のベースとなっている。片方で現場最前線部隊と、片方で網打ちの「綱領委員会」という組織の構造は、7・6で田原氏が関西から指示を出すという構造となった。何故なのか？

67年10・8から佐世保エンブラ闘争まで昇る太陽のような闘いから、激動の日大・東大・全国全共闘を経て、じりじりと突破できない壁に直面する闘いになり、結集数は膨張するが展開を阻まれるという事態になっていった。ブント系の中心メンバーの中に「壮大なゼロ」とシニカルに表現するいらだちが広がっていった。しかし、それは自分達が、全共闘の闘いを深耕できなかった裏返し表現でもある。それは現場最前線で戦う部隊から始まり、その部隊から赤軍派が誕生した。しかし、誕生した軍は裸の軍であった。軍があるなら政もあるはずだが、政（＝大衆運動）は無く、軍が政であるという転倒が始まった。関西では69年の7・6事件に関して「赤軍派がブント議長をリンチにし、拉致して途中で路上に放置し、議長は権力にパクられた。日向派は革マル主義だ」との情報が出てくるが、東京で何が進行しているのか実際のところ霧の中であり、全ては疑ってかかる必要があった。赤軍派をブランキストとして切ったブント関西は、69年秋に中電マッセストを闘ったが波及性を獲得することなく街頭闘争に終わった。

レーニン帝国主義論をベースにし、ワイマールドイツに於ける社会民主党・共産党の敗北を教訓とした「プレファシズム論」は、戦術（工場委員会からマッセストへ）と過程（階級形成）を吟味することなく70年闘争に突入し、その間隙を赤軍派が突破することとなった。ブント指導部（70年の秀逸たる田原理論）も、戦略的展開性（トータリティー）に欠けるものがあり、状況を切り返すことができなかった。塩見孝也を中心にして展開された「世界一國同時革命」―「国際根拠地」―「民族自主」の流れは、「過渡期世界論」が内包する欠落を「順次補完」する流れになっている。根底的な欠落は縦軸（過程としての階級

であり、即ち党と階級形成である。組織問題は、当然即戦略問題に連結するが、ここでは触れない。順次補完というのは、当初の「世界一國同時革命」論が根底的に孕む誤りを正すのではなく、それが持つ欠落を対症的に順次補完したということである。この流れを逆にたどるとことで、それ本来がもつ欠落の体系が鏡に写し出される。即ち、それは69年—70年プレファシズム段階（過渡期世界論）で、我々の前段階武装蜂起によって世界ブルジョアジー打倒の戦いが始まるということであり、「繰り返される敗北と「勝利」をくぐり抜けて、我々の党と階級形成（組織陣形）が進むという過程を欠落させたスキームになっている。我々の側の階級形成とその陣形も指定されず、プロレタリア階級の権力の掌握と国家の統治、世界ブルジョアジー（米軍）に対決した東アジアの階級と民族の連携も指定されていないものであった。

在ったのは、ジャコバン（政治過程論）的戦術が同時的に、対権力の階級形成と世界性を獲得するかのとき革命的ロマンの夢想であった。「世界一國同時革命」の「一國」が、その体系が持つ戦術的且つ平面的指定を更に鮮明にするものとなっている。この未熟な革命的ロマンの夢想が、民族社会主義・国家社会主義に過ぎない「毛沢東思想」「主体思想」に包摂されることとなったファクターであり、同時にこの夢想の中にある中央権力闘争とマッセストの都市型戦術体系がそれを阻んだファクターになっている。

その後の70年代型大衆武装闘争を継続して戦ったのは、65年世代である若い日向翔を中心にしたブント戦旗派であり、彼らがブントの継承者であるというのは結果が語っている。彼らが何を主張して何処に到達したかは知らないけれども、78年の成田管制塔占拠闘争を頂点とする70年代—80年代の沖縄・三里塚・サミットに対する闘いを、継続して戦い抜いたことでその資格は充分である。その後のこと（脱構築？）はさでおきである。

主観的意図はともあれ、政の無い軍の中軸が我々61・62年組であるのに比べ、上の世代と同時に下の世代になるほど「政」と「展開性」

が復活する。若宮正則・赤軍、重信房子・赤軍に「政」と「展開性」があるのは何故なのか？当時の分派闘争の文書を後で断片的に目にするようになるが、我々の世代の方に「深さと広さ・展開力」が無い。やったことの「責任を担い」切ろうとしたが、あるのは左脳のロジックばかりである。そしてその器量の狭さは、80年から90年の時代の転換に対応出来ない体系であった。

リッダ闘争の準備でレバノンに行き、02年3月30日（パレスチナ土地の日）に日比谷公園で焼身自殺をした檜森孝雄君の遺稿に「ブント田原理論の再評価を」とあるが、我々の世代は、60年代後半当時の田原氏の口述を「ふろしき」として聞き流していた。田原理論が、我々のレベルを超えているのはわかっていたが、双発ジェット（思想的トータルティ）に例えれば、それは「片肺である。」として60年の遺産を学ぼうとしなかった。「政治過程論」がレベルアップして「党と階級形成論」として展開された憶えはない。69年の最も大事な時に80年に向けた「戦略論（綱領）」「党組織論」「国家論」はブント内の何処にも無く、結果としてブント総体の力量不足が70年闘争を分解させた。

党派（政治的戦略的ヘゲモニー）を拒否し、全共闘に収斂させると言う「党と国家」を峻別しない独立派は論外であるし、同時に「武装闘争を容認するか否かが、革命派か否かのメルクマールだ」と言うのも、自らの政治的戦略的ヘゲモニーの無さを証明するものであり論外である。双方は一見対極にあるように見えて、実は共通のカテゴリーにある。問題は政治的戦略的ヘゲモニーの内容であり、プロレタリアートの階級的成熟（団結）の度合いである。

(2)

「70年」後はそれぞれの道である。私はその「70年」を引きずったような解雇に遭遇し、10年近い解雇撤回闘争をすることになる。帰る職場は消失してしまっていたが、更に経営者を追い回した。解雇闘争を担った、京都地方地域労働組合のタイトルは「うらみつらみのこ

りかたまり」であった。解雇通告を受けてからの宙吊りのような状態から、解雇に対応するために近代社会の原点たる社会契約説から再出発（位相の転換）をした。17C・18Cのブルジョア革命の思想＝ホブズ・ルッソーやオーステン・ブロンテ姉妹を読み、安藤昌益・中江兆民そして山本周五郎、中川周平を読んだ。三里塚闘争に参加し、自らの闘いの再構築を進めた。ある朝、全国政治闘争絡みで、フル装備の機動隊に組合事務所を包囲されガサ入れをくった。実態は情念と素朴な労働法の解釈による戦いの展望だったにも、拘わらずである。敵対した経営者と日本共産党の労働法体系が、国家の社会政策上のカテゴリーにあり、現行法体系よりも前近代的であることを明らかにして闘いは勝利した。

全体の時の流れは引き潮と転換であった。獄舎と戦場から帰還した者と話す機会が増えた。どちらが戦場なのか獄舎なのか、何度も考えさせられた。つましい人々は災難に遭うまで「身を削って」「他人を恨まず」「御法度」「御上」「手が後ろに回る」「前科者」などと、恐ろしい世界のように獄と戦場のことを言う。古来、日本の権力は渡来の天津神として、民衆のはるか天空に居丈高に聳え立ち、民はつましく統治し易い。獄と戦場とシャバとの往来は、目に見える38度線の如き非常線とは違う。俗世の事件・災難で突然に戦場に放り込まれ、狂気の世界をくぐりぬける様は、全くシビアで凄惨である。我々はもっと地上と地下を往来し、この世の境界の何たるやを知る必要があるし、また明らかにする必要がある。

私はこの文章で、「党と階級形成」について言及してきた。「過程としての階級」と言うのは当然戦略問題にリンクしている。書いた言葉は過去の左脳のロジックとは位相を異にする、一見毒にも薬にもならないような世俗人の言語である。その意味で不可能に近い思い上がりであるが、同世代として共通の言語を取り戻すため幾つかのメタファーを入れた。その後の時代の動きは、それさえも紙屑・亡霊にしつつある展開であるが、上の世代と我々の世代の何人かはそれを紙屑・亡霊にはせず、ダブルスタンダードで、今も院政を敷いている。現実の深奥

は、それを必要としているということだろう。しかし、上皇たちの言葉は硬直し、位相の異なる言語には目は届かず、ましてメタファーなど気づきもしない。映画「神々の深き欲望」のシーンが甦って来る。

東京で叫ばれている「パラダイムの転換」というのは、この本質の議論ではなく、70年とは無関係な知識人の文化運動になっている。宗教改革と市民革命を経験しない日本の近代思想は、思弁的完結と清算のサイクルを繰り返してきた。「パラダイムの転換」という議論は、その意味で日本の近代思想（我々）を照らし返す鏡（対象化）になるが、この本質はスピザノやホブズにあるのではなく、自らを解体再編する方法そのものにある。それにしても、我々は遠回りを繰り返している。波は、いつも海の向こうからやって来て、時間は待ってくれないからであろうか？振り返ってみれば、我々が歩んだ道はプラグマティストの道であるが、それとローティを志向するという事とは、全く別のことである。

(3)

ヨーロッパ遊牧民族の個＝individualとアジアモンsoon農耕民族の個との間には、同じ言葉でも概念として大きな違いがある。古来、略奪・虐殺・支配・隷属等人災との闘いを主にしてきた麦の風土と、水難・旱魃等天災との闘いを主にしてきた稲の風土の違いであろうか。個＝individual（もともと、「分けられない」という意味）の概念がヨーロッパとアジアで違うということは、とりもなおさず共同体（ゲマインデORコミュニネ）の概念も違う。それは、「経済学・哲学草稿」から世界のマクロ的把握としての「帝国主義論」へというサイクルと、片や現実的存在としての男と女、家族、生活と命の再生産のサイクルとのトータルティ（力）の違いでもある。

市井（俗世）に生きる者の理解として、前者のサイクル＝マクロ的把握を所謂「インテリ・学界のもの」として切って捨て、「アジア型の個と共同に長所が在る」として、元一橋大学長の阿部氏が「市井の調和・共同」を説いている。大東亜共栄圏のベースになった「隣組」と「村

ではなく、庶民の間の個の尊重と多文化共生を説いている。職場とか町・村とかの「小集団の平和」を説いている。

生産力と生産関係（私的所有）の矛盾・・・プロ独と計画経済（論）というカテゴリーを、人間世界の外界へ一歩広げて生命系経済学（論）としてマクロを把握する作業も必要だが、「市井の共同」も必要である。

生命系経済学は、景気循環で説く新古典派経済学やより広い人間社会総体から説くマルクス経済学でも足りないとして、人間社会が生物・地球・太陽と不可分なものとしてより広義の経済学が必要と説く。生命系を以下、①開放定常系の流れ（水・地球・太陽）、②増殖による種の保存（生物）、③共同主体的な社会関係（人間・社会）の三重構造とし、①の中に②が、②の中に③が「入れ子構造」に入ると捉える。①②③のそれぞれの内部と相互関係のエネルギーや熱や物質の拡散・移動を示す物理量を「エントロピー」で表し、地球を“生きている地球”と説いた。しかし、この理系の生命理論は③に対する、とりわけ環境問題・資源問題・南北問題に対する弱点から様々と見直されつつある。

生命系経済理論は、レイチェル・カーソン「沈黙の春」や環境ホルモンの研究や耐性菌の増殖対策やDNA学が相互進歩の土壌となっている。18—19Cの産業革命以後の近代社会の負の遺産は、取り返しのつかない事態を招いている。現代世界は金と物と人の流れ（生産力）が最早、国民経済の枠組みをはるかに飛び越え単一世界経済として在り、アングロサクソンとユダヤの巨大資本がこの単一市場経済（投機サイバー経済）を支配し、A・A・L・Aを収奪し、飢餓と環境破壊を省みていない。しかも、この支配収奪＝富の不公平な分配構造は北と南の間のみならず、「先進国」内部においても且つ又「後進国」内部においても拡大進行している。生命系経済学は、その視野の広さからこうした現実の分析と対抗の軸として有効である。

WTOに対するシアトルの大抗議デモがG8に対するジェノヴァの大デモは、この現代世界の流れに対抗したものである。「途上国債務の削減を！」「穀物の遺伝子操作をやめよ！」「特

許権・知的所有権の延長反対！」「地球は売りものではない！」と。巨大世界資本（イギリス）は、第一次世界大戦でイスラムに分断ファクター（イスラエル国家建設）を持ち込み、中東の資源を掌握し、第二次大戦ではそれをアメリカが継承した。パレスチナの抵抗とアルカイダの9・11テロは、この流れに対抗するものである。

世界はスミスやリカードが言う、「商品の優位から経済特化・分業・自由貿易」となる近代社会をリードした三つの概念が、今や深刻な破壊（10億人余の飢餓）と衰弱（費用対効果の面でもしかり）をもたらす時代に入った。

初期の生命系経済学が、人間社会と生物の生命連鎖、地球・宇宙との熱や物質の相互移動を物理量で説いたことと、人間社会の在りようを理想的な生活への転換としてドンキホーテの如き生活を説いたことと表裏一体であり、如何にも理系の展開らしい。とはいえ、この広義の経済学は従来からのマクロ的把握（市場経済か計画経済かの二者択一）の持つ転倒を、異なった角度から指摘することによって新たなマクロ的把握の可能性を指し示した。生命系経済学は、権力とは程遠い末端社会（南アジアの地域経済）の経済分析から市場経済でもなく又計画経済でもなく、“協議経済”という未来型の経済社会を提示し、もって、マクロ経済学の転換をも指し示している。生命系地域主義とも言うべき中村尚司氏やポール・イーキンズ氏の提起がそれである。こうしたマクロ的把握を阿部氏が「所詮インテリ・学会のものとして切り捨てる」と言うのは、思想家でもない市井に生きる者として高邁なことばかりを言っていると、転倒しますよ、所謂「世間」＝小集団の調和も大切ですよ、ということであろう。

富の配分格差は、地球規模で且つ又身近な地域社会で益々拡大しつつある。市井の共同が益々困難になりつつある。多文化の共生・環境と人権の闘いと平行して、それを支える基盤である生産の共同即ち明治維新以降に権力によって取り上げられた（私的に専有化された）土地・労働・分配（資本）を農・工・商・サービスの諸分野で、地域の共同システムと

して組み替える作業が必要である。この主要な担い手は「自立を抱いた個の集団」＝NGO/NPOたちになる。中央権力の出先機関に成

り下がっている地方自治体との共闘も射程に入れる必要がある。

『田原論文集』について

05. 11. 12. 畑中文治（共産主義者同盟首都圏委員会）

○畑中文治

71年早稲田大入学

73年社会主義学生同盟加盟

74年共産同遊撃派加盟

◎現在「共産同首都圏委員会」「共産主義運動年誌」会員

以下は、直接には、上掲の北村さんの『コメント』に触発されて返信した私信メールの一部である。『コメント』の主要な内容にかかわるものではないが、『論文集』刊行の意義と、ブント総括の際の視点に多少資する点もあるのではないかと思ひ以下掲載させていただくこととした。

（以下メール）「それと、田原論文集についてですが、これは先輩たちや、岩田さんのご意見も聞こうと思っはいるのですが、特に『共産主義者同盟の総括と綱領問題』について、私の考えでは、ある程度組織的な検討を経た、第二次ブントの唯一の党史・綱領論史であるというところに意味があるのではないかと思います。綱領委員会として公表されていないこと、当時も今も、田原論文としての認識はあっても綱領委員会責任者の田原の論文という認識は誰にもないことなどから、私の勝手な思い込みかもしれません。

しかし筆者がその自覚を持って作成した文書であることは端々に伝わってきます。内容的にも、賛成しないところ（具体的には、革通否定、プロ通一関西評価の文脈）は多々ありますが、比較的公平な目配りがあるように思えます。少なくとも、ブント総括は、分派の数だけありますが、1～2次ブントを全体として総括しようとしているのは、私が見たかぎりでは他にないと思います。

それと、これは単なる感想ですが、前衛派批判が出てくるところは、以前は唐突な印象をもっていましたが、佐藤浩一さんへのメッセージであったのかなあと思いました。

いまや確かめるべくもないことですが、あれこれ含めて第二次ブントの総括と統一のための最後の努力というような気がします。その意味で、第二次ブント四分五裂以後、田原さんが沈黙したのも理由のあったことだし、残念ながら、第2次ブントに殉じてしまったのかなあと思っています。

まずは感想まで。（以上メール）

やや回顧めいてしまうが、『共産主義者同盟の総括と綱領問題』パンフを読んだのは70年ごろだったと思う。蔵田計成『安保全学連』が、ブントを知る通史としてはあったが、さらに踏み込んだ当事者性に踏まえた文献の紹介と評価など、わからないなりに勉強になった。やはり前後して読んだ『プロ独への道Ⅲ』も問題意識の豊富さに好感をもった。無党派高専生活動家に過ぎない私には、内容的理解もさることながら、70年前後のブント党内事情については知る由もなく、ただ、すでに旧再建委周辺にいたことによって、当時も、その後も、どういう訳か再建委の政治文書では、田原論文への言及が一度ならずあったことで、親しみも感じていた。

それはともあれ、メールの中でも書いたが、第二次ブントを知る先輩たちが、その時点で、田原論文をどう受け止めていたのか、それはブントにとってどういう意味があったのかを機会があればご教示いただきたいと思う。例えば、当時荒氏は次のように言った。有名なことだからわざわざ繰り返す必要もないかもしれないが、一つの、そしてそれなりの理由のある主張であったと思うので確認しておきたい。

「要するに、第二次ブンド＝関西ブンドは、いわゆるブンド（歴史的な第一次ブンド以来のそれ）とは、実はその理論的継承の面から考えて、縁もゆかりもない、理論的にはむしろ小野義彦などの構改系諸派に近い、関西で独自に発達した、それ故関西独自の戦術左翼集団だったのではありませんか。」（『理論戦線』第9号『革命論構築に向けて』）
今となれば清算主義といって一蹴するのはたやすいし、青年客気の筆の勢いと思える年齢にもなった。ただここに、荒氏の個性に還元

するだけでは納まらないものもあることは確認しておきたい。党の組織、党の理論というものを考える上で忘れることの出来ない教訓があると思う。田原さんの理論活動も、この党を離れてはなかったで、あろうし、むしろこの党の理論にせかされて積み重ねた活動をわたしたちは論文集で目にしているわけだ。共産主義運動の連合・統一を目指す上で、その歴史と理論を扱うべき術と教訓をここから掴み取りたい。

三千年期最初の独立国～東ティモール民主共和国パイロット農場を目指すプロジェクト準備活動

東ティモール日本文化センター (Timor Lorosae Nippon Culture Centre/TNCC)

1 なぜ今東ティモール農業を支援する準備を始めたか？

2千年期(1001-2000)後半の500年間は資本制生産様式の生成・発展・爛熟によって、地球上の人類は世界市場に組み込まれ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの先住民族は欧米日本列強の植民地侵略の対象となって悲惨な略奪の悲劇をこうむった。

スダ列島の最東端にあったティモール島も16世紀ポルトガルに植民地化され後に西半分はオランダに分割占領された。ポルトガル領東ティモールとオランダ領西ティモールは1942年2月から1945年8月まで日本帝国主義に占領され、日本敗戦後は再び東はポルトガル領、西はインドネシア共和国の1部となった。1974年4月ポルトガルのいわゆる「カーネーション革命」で成立した社会民主主義的政府は全ポルトガル植民地の独立を憲法に書き込み、東ティモールは主権回復の過程に入り1975年11月27日東ティモール独立革命戦線(フレテリン)は「東ティモール民主共和国」の独立を宣言、主権を回復したベトナムをはじめ15カ国が承認した。その直後1975年12月7日インドネシア共和国スハルト軍事独裁政権は国際法を無視し東ティモールを侵略軍事占領し、1976年併合宣言。

東ティモール民衆は東ティモール民族解放軍(ファリンティル)と東ティモール民族抵抗評議会を結成して主権回復運動を展開し、1999年国連のレファレンダムで78.5%の民衆が完全主権回復を選択した。しかし、このレファレンダムは侵略者インドネシアが治安責任をもつという国連決定の致命的誤りもあり、インドネシア軍・警察に支援されたミリシアと名乗る暴力集団によって、東ティモールはインドネシア占領中の20万人を超える犠牲者に加え、数千人の人的被害と国土の8割が破壊されるという1999年9月の「ブラック・セプテンバー」と名づけられた破壊をこうむった。1999年10月20日国連の多国籍軍が入り、インドネシア軍が完全撤退し東ティモールは、国連管理下で主権回復の過程を経て、2002年5月20日「東ティモール民主共和国」は完全に主権を回復した。

この500年間に及ぶポルトガル・日本・インドネシアの植民地侵略の結果、東ティモールは富と若い世代の教育の機会を奪われ、資本制生産様式列強の侵略の世界史的犠牲の一典型として世界最貧国のひとつに転落させられたままである。文盲率は国民の半数といわれ、国民の大半は1日50米セント(約50円強)で極貧の生活しているといわれる。

東ティモールの草の根の民衆の経済的貧困を打開するためには、人口の大部分を占める農業の草の根からの再建が不可欠であり、民衆の伝統的有機農業の発掘と継承発展が求められている。

第二次大戦中の直接侵略者であり、インドネシア侵略時には対インドネシア経済援助によって侵略のスポンサーであった日本政府の根本的誤りを反省し、日本政府のアジア外交の根本的転換を迫りつつ、民衆レベルでの支援のひとつとして、このたび東ティモール農業支援プロジェクト準備調査団を派遣することとなった。
2 東ティモールの農業再建パイロット・ファーム建設を調査するチームの派遣

東ティモール日本文化センター(2000年1月設立のNGO)では、東ティモール農村からの要望に応えるため、2005年数回にわたるプロジェクト準備の研究会(東京)を踏まえて、2006年2月にTNCCとあす農場との共同の調査チームを現地農村地帯に派遣する。現地農業の実情を知り、東ティモール農業再建のパイロット・ファーム建設に今後日本からの何らかの援助が可能かどうかを調査してくる計画である。

このプロジェクトでは、現在キューバで展開されている民間農業協同組合の手による有機農業の先進的な成功経験も学びながら、東ティモールの民衆の当面の最大課題に協力できるかどうか見極めていきたい。

2006年3月にはできればこの調査の報告会を日本で行いたい。

3 これからの課題—私たちのできること
日本政府のアジア外交が混迷している中で、私たちのささやかな調査準備活動がどれだけの成果を上げ、東ティモールの民衆の下からの経済再建に協力できるかまったく不明ではある。しかし、かつて直接・間接に東ティモールを侵略した日本民族の一員として、民衆レベルからどんなにささやかであっても、貧困から脱却し幸福を追求し始めている南の民衆の農業再建の試みに、日本の民衆レベルからの有機農業のパイロット・ファーム建設支援の輪を広げていければと願っている。

本日ご参加の皆さんのご助言とご協力をいただければ幸いです。

東ティモールサメ農業プロジェクト準備会・東ティモール日本文化センター 高橋道郎

連絡先 980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町1-2-6

電話 090-3360-9002

FAX 022-714-6233

Email:michio-t@mtg.biglobe.ne.jp

URL: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~tncc>

http://www.jomon.ne.jp/~odayu/writing_east_timor.html

○「同志社大学学友会」資料編纂委員会のアピール

水野裕之

同志社大学学友会の事務職員をしていました水野と申します。かつて中島鎮夫さんが活躍され、ここに来ておられる皆さんも何らかの形で関わりをお持ちかと思うんですけども、戦後直後から60年代、70年代を経て様々な運動を展開してきた同志社大学学友会は、2004年度に解散いたしました。

「何でそんなことになったんや」と皆さんは思われることでしょう。同志社大学学友会は、サークルと自治会組織を含めたところの全学

的な組織であり、あくまで学生の合意に基づく運動体であったと思います。ですから、時代が変わり現代的な状況においても、考える主体としての学生がいる限り何らかの運動はできるんじゃないかと私なども思うんですが、今の学生の意識からはそういう組織を担うという発想が出てこないというのが現状です。云わば全社会に対する、小さく限っても大学当局に対する一つの対抗的な価値を作るんだという意識がなくなってきたんじゃないかと思っています。大学自体も大きく変貌しました。か

つて大学には、教員学生も含めて創意工夫で何をやってもいいんだ、もちろん運動を始めた者の責任は伴いますけれども、そういった雰囲気があったと思います。ところが今は、大学当局も学生側も何をしておいてもまず社会に順応しようとしている。それほど「社会」あるいは「国家」というのは思考の前提として強固なものなのかと思ってしまうのですが、まさに今日の大学は社会に準じた実業の世界として存在しています。そういった状況に押し出されるようなかたちで、学友会は最後は学生による自主解散というかたちで消滅いたしました。しかしながら、私自身70年代学生として活動してきた志向性は今も失っていませんし(先程反弾圧アピールをされた松岡さんは歴史哲学研究会という今は無きサークルの先輩でもあります)、かつての我々の大学批判は必ずかたちを変えても影響を及ぼすだろうと考えます。

受付のところでご紹介しました資料集ですが、50年代後半から解散までの「同志社の葉」という学友会の新入生向けのパンフを年代順に抄録しただけの編集は芸のないものですが、同志社学生運動の紆余曲折の歴史

がぎっしり詰まっています。同志社関係者に限らず興味を持って頂ける方には、すべて無料でお配りしております。最後の学友会予算を使ってつくりましたので、かつて学友会費を払われた方々には余剰金の還元という意味もあります。ぜひ手にとって頂きたいなと思います。

それから、これ以外にも運動資料がたくさん残っています。ある意味では同志社には全学的な組織が温存されてきた側面がありますから、意外なほどに資料が残っています。それをきちりとした形で整理し将来に向けて保存したいと思います(資料でお配りした年表は、その作業の手始めとして作成したものです)。資料の存在は、一つの客観的な歴史でもありますし、また我々の運動が内包した問題が死滅せずに永続することの一つの反映でもあります。今日、ここにお集まりの方々は、かつての運動をいろんな意味で経験され、現在も状況に相渉る志を持っておられる方々ばかりだと思います。どうか資料編纂委員会の今後の活動に御協力をお願い致します。以上、学友会の解散と今後の資料整理のことの報告を終わります。

閉会のあいさつ

岩田 吾郎

どうもみなさん！岩田吾郎と申します。本日は、同志社及び関西の各大学の出身者及び、全国から様々な方が参加して頂き、どうもありがとうございました。

お手元の「田原芳主要論文目録」にあるように、「田原芳論文集」第2集を、まず刊行していきたいと思えます。まだ、いわゆる60年代末の論文で未入手の論文があります。ぜひ、その協力をおねがいしたと、関西ブント機関誌『烽火』ですけれども、無い分がございませぬ。ぜひ、ご提供を御願ひしたいと思えます。これが第一点です。

もう一つは、本日の集いを開催するにあたって、いろいろな危惧といひますが、いろんな

ご意見もありました。一つには、思い出、追悼、回顧ということで集まって頂きました。

同時に、少なくとも私も、「共産主義運動年誌」会員として現役です。こういう形で集まって頂く事は、大変「幅」があるという内容で、関西ブント、第二次ブントの活動があったことの証明です。しかし、それが分派闘争を経て全くバラバラになっていくという状態に、現在は在ります。スピーチの中に、第二次ブントの教訓として「……一致点を見出す。……一致点を作るというのは大変だけれども、相違点をつくる、見出すというのはそう大変でない……」等の指摘があったと思えます。本日の集いがそのような第一歩なれば幸いです。

さらには、「関西ブントの全国化」というスピーチもありましたが、もし、21世紀に於いて、「共産主義者同盟」が再建されるならば、この集いに参集されている方々の多様な意見、多様な領域の運動、良心的社会人の方々の支持、共感を持ってしか再建できないと思えます。

その点では、「関西ブント」は「幅」があった形で、運動と組織、理論をもっていたと思えます。そういう点を、「田原芳論文集」の復刻刊行で、私は復権していきたいと言う事がありました。今日、ここに参集された皆さんが、今後どのような形で結集して行くかは別として、全国からの参加と、生き生きとしたスピーチを、どうもありがとうございました。

【復刻】若きプロレタリア戦士・

同志望月上史の死を悼む一追悼の辞

共産主義者同盟赤軍派 (機関紙『赤軍』3号・69年10月)

○望月上史

65年同志社大入学

65年同大新聞局加入

66年社会主義学生同盟加盟

67年京都府学連・書記次長

68年共産主義者同盟加盟

69年10月「7-6事件」後死去(22歳)

9日

1969年9月29日朝、吾が同盟の最も勇敢な活動家、同志望月上史は意識不明のまま22歳の若き命を絶った。同志望月は吾が同盟が67年10・8から本年4・28に至る一つの時代を経て、困難な党内闘争一分派闘争を戦い抜き、党外分派として創立される以前からすぐれたプロレタリア前衛の一人であった。共産主義者同盟中央学生組織委員会にあって、彼はブント中央派のスターリン主義的党指導、中大派の大衆運動主義(反大学、解放大学)に対して容赦ない闘争を挑み、そして又、京都府学連の旗の下、学生大衆の反帝闘争の組織者であった。

本年1月、同志望月は一日も休むことなく驚異に値する英雄的、情熱的、自己献身、犠牲的献身をもって1・18、19以後の全国学園闘争を京大闘争の烽火としてあげ、京大、立命大、東大を安保闘争の戦列として打ち固めたのである。同志望月上史の精力的活動と何ものにもひるまぬ戦闘性は、敵権力からは憎悪的であり、昨年御堂筋闘争で敵権力の報復を受けた。しかし、獄中にあっても同志望月は、ひるまず敵権力との闘争を闘い、理論深化をはかり、釈

放後も不屈の革命的行動でもって応えたのであった。同志望月を取り巻く条件は精神的にも物質的にも良いものではなかった。しかしこの時にも同志望月はそのエネルギーの全てを注ぎ、今秋安保決戦を世界革命戦争と内戦の突破口として戦うべく準備を開始したのであった。京都府学連の書記次長として又同盟学生組織委員会の中心的存在であった同志望月の超人的な活動は67年10・8羽田闘争一萌芽的武装闘争以後の困難な時期に人々を奮い起たせ励ましてきた。それはいかなる人をも感動させずにおかなかった。4・28闘争と破防法攻撃で同盟中央が混乱状態にあったにもかかわらず彼は関西にあって4・28闘争の敗北を総括し、新しい時代一階級闘争の転換を予見したのであった。そして7月6日、恐れず彼は赤軍派物理的解体(プロ通2)という同盟中央派、中大派の暴虐に立ち向かったのである。

同志望月、君の生涯を振り返った時、我々は君の生命がただプロレタリア解放の為にのみ燃え上がったことを思う。同志望月、君こそが吾が共産主義者同盟赤軍派の誇るべき、又、最も必要とした存在であった。我々は心から君を悼

む。そして君を奪った、野合ブンドへの限り
ない憎しみをこの数ヶ月にもわたる党の為の
闘争一党の革命と党としての闘争一赤軍の建
設として獲得してきた。君は全ての人に真理
を語り敵階級への憎しみを隠さなかった。君
は強じんな頭脳と一步も揺るがぬ意志と、い
かなる熱狂にも動ぜぬ冷徹な目とそして純朴
な魂をもっていた。

もし君が波乱に満ちた生涯を続けたならば成
し遂げられたに違いない成果を思う時、我々
は心から痛惜の念に満たされる。君は恐らく
最高の変革者として人類の偉業を成し遂げた
であろう。君のすぐれた才能がまだまだほと
んど開花せぬうちに奪われたことは吾が同盟
にとってのみならず世界武装プロレタリアー
トにとって大きな損失であった。

同志望月、君の死に際し我々は誓う。君の
死に報いるのは君の意志を受け継ぎ恐れず革
命的戦闘を組織する以外にない。君の死をつ
ぐなうものそれは世界革命戦争の勝利をめざ
し、我々が戦う力を倍化することである。9
月13日以後敵権力の赤軍派に対する暴虐は
とまることを知らない。世界革命戦争の勝利
はおびただしい血の上にかち取られるものか
もしれない。我々はその日の戦いに備えて君
の屍を超えて行こう。君の死をつぐなうべく
数百の新たな革命的同志が吾が同盟の戦列に
加わりつつある。

共産同赤軍派は世界革命戦争に勝利するであろ
う。

同志望月よ、安らかに眠れ。

定価¥500

(発行) ★田原芳論文集復刻刊行委員会

(連絡先) 東京都千代田区富士見町2-2-2

東京三和ビル303・スペース303 411

『共産主義運動年誌』編集委員会

電話・FAX 03-3564-2735